

21826

31
475

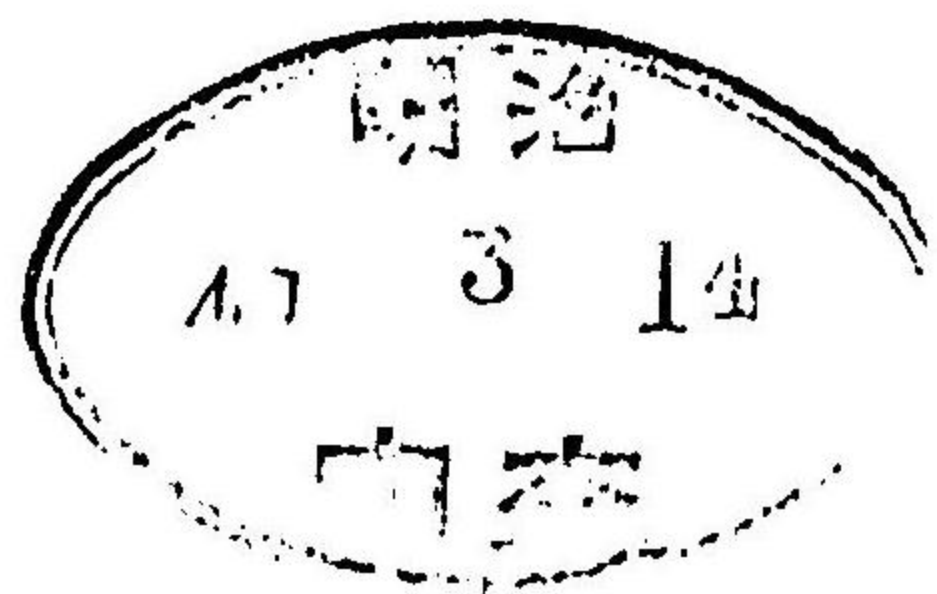
現代名流自傳



31-479



名流自傳



現代名流自傳第壹編 目次

予の受けたる境遇と感化……………江原 素六……………

一年四十俵の祿——給仕と房楊枝の内職——先生の細君に對する感謝——十一歳の一月から全くの自活——楊枝原料の買出しと侍の體面——盆燈籠の下で讀書——十八歳始て兵士となる——新宿より愛住町への移轉——穴を掘つて預りの書物を埋む——家庭の感化は今に奢ることゝ懶けることが出来ない——貰つた給料と妹の衣服——老人の友達が多かつた——初めて蘭書を讀む——擊劍の免許と初めて酒を飲みたる事——講武所の教授方——西洋流練兵の幼稚さ加減——弟の爲にした苦勞——頭取則ち今の歩兵大尉となる——撤兵隊長となる——京都に留まりし譯及び故參の者にいちめられし事——佛蘭西寄贈の大砲を大阪まで運ぶ——慶喜公大阪引上げの殿軍——軍用旅費を奪はる——紀州藩の狼狽と千兩の旅費——船頭への談判と品川への安着——撤兵頭となりし當時の家庭——切腹の覺悟と益田參謀への引受け——撤兵隊木更津へ脱走す——我隊の全勝と敵隊長との組討ち——長持の裡への潜伏と銃創の手療治——官軍捜索の虎口を逃る——金錢に關する奇妙な運命——函館の脱走に加はらざりし顛末——駿河への脱走と水野池三郎の假名——静岡藩の少參事となる——沼津兵學校の創立と我國小學校の元祖——沼津兵學校の閉鎖——暗殺を免れたる話——我國最古の銀行と牧畜業——學校に刀懸がある間は駄目だ

現代名流自傳第壹編 目次

予の受けたる境遇と感化……………江原 素六……………

一年四十俵の祿——給仕と房楊枝の内職——先生の細君に對する感謝——十一歳の一月から全くの自活——楊枝原料の買出しと侍の體面——盆燈籠の下で讀書——十八歳始て兵士となる——新宿より愛住町への移轉——穴を堀つて預りの書物を埋む——家庭の感化は今に替ること、懶けることが出来ない——貰つた給料と妹の衣服——老人の友達が多かつた——初めて蘭書を読む——塹劔の免許と初めて酒を飲みたる事——講武所の教授方——西洋流練兵の幼稚さ加減——弟の爲にした苦勞——頭取則ち今の歩兵大尉となる——撤兵隊長となる——京都に留まりし譯及び故參の者にいちめられし事——佛蘭西寄贈の大砲を大阪まで運ぶ——慶喜公大阪引上げの殿軍——軍用旅費を奪はる——紀州藩の狼狽と千兩の旅費——船頭への談判と品川への安着——撤兵頭となりし當時の家庭——切腹の覺悟と益田參謀への引受け——撤兵隊長木更津へ脱走す——我隊の全勝と敵隊長との組討ち——長持の裡への潜伏と銃創の手療治——官軍捜索の虎口を逃る——金錢に関する奇妙な運命——函館の脱走に加はらざりし頭末——駿河への脱走と水野泡三郎の假名——静岡藩の少參事となる——沼津兵學校の創立と我國小學校の元祖——沼津兵學校の閉鎖——暗殺を免れたる話——我國最古の銀行と牧齋業——學校に刀懸がある間は駄目だ

予の受けたる境遇と感化……………南條 文雄……………三

母より聴きし風流の話——第二に受けたる得一師の感化——兵法の書物に依て得たる宗教上の覺悟
——佛祖統記より見出したる爲法不爲身の五字——英語も知らずに英國へ留學——倫敦より牛津に移る——初めてマクスミュラー先生に面會す——マクスミュラー先生の教育——易行院法海と頼山陽との話——生れた日の出來事

予の受けたる境遇と感化……………井上哲次郎……………三三

一番初めに受けた菅公の感化——次は中村徳山先生——原坦山師に依て受けたる佛教——大學在學中に得たる思想上の影響——倫理と宗教に對する議論の終始一貫——東洋哲學史の編纂——洋行中の感化——服膺せる二個の格言

予の受けたる境遇と感化……………海老名正……………三五

母の死と未來の觀念——誤て隊長を傷く——破壊主義のやり始め——精神の修養は眼病のお蔭なり——冬枯れの境遇——陽來復す——教會獨立論の勝利——邦人にては藩山と小楠及び豊太郎——外人としてはゲーテとホルとセンス及びシユライエルマツヘルと使徒パウロ

予の受けたる境遇と感化……………前田 慧雲……………三五

第一は祖母第二は父と叔父——三國誌と日本外史——石泉僧叡の事蹟に感ず——藏書と書畫の感化——嗜讀したる歴史綱鑑補——十七歳名古屋に行く——東京留學の斷念と算術の嫌い——大寶師の教訓

現代名流自傳第壹編 目次 終

現代名流自傳

第一編

子の受けたる境遇と感化

江 原 素 六

一年四十俵の祿

元來私は幕府の小身で極めて困窮の家に生まれました、幕府から賜はる祿は一年に四十俵であります、一俵は三斗五升入が定則でございますから丁度一石四斗になります、之を金にいたしましたならば當時の相場で十一圓二十錢程になります、其金を以て私の八歳の時の有様を考へれば祖父に兩親、私、弟二人に妹一人都合七人、十一圓二十錢で七人暮すといふのでありますから家族汲々として辛うじて生活をして居つたのであります、夫故私は八歳まで寺小屋へ行く

こともなりませぬでした、八歳の正月に私の伯父に當る小野辨之助といふ者が机を僕に擔がせ、紙に筆墨などを揃へて其頃寺小屋へ納むる束修二百文までも揃へて是非共手習をせねばならぬと言つて親爺に勸めて、初て寺小屋へ參つたのが私の記憶の始でありました。

給仕と房楊子の内職

第二の私の記憶はその八歳の暮に私の大伯母に當ります願生院といふ比丘尼がありまして、それは徳川家齊將軍の奥に勤めて居つたもので、將軍の御臺所が薨去の後剃髮して嚴肅なる精進を守つて朝晩その位牌に向つて經を讀み供養をして居たものである、其の大伯母の所へは、正月澤山の年始客が來ますに付て、暮から翌年一月の十五日頃まで來客の取次、茶、烟草盆等を出す事に雇はれました、さうして其間に報酬として二十五錢、昔の一步といふ金を貰

つたのである、夫は非常な恩恵であつた、一步といふ金は其時代に容易に貰へるものでは無かつたのを、私を愛して與へて呉れました、其事は丁度十四歳まで年々歳々繼續して居りました、其間に家庭の高尙なる言葉、行儀作法などは充分薰陶されたのである、是が私の生涯の餘程得になつたと思ひます、のみならずその二十五錢で、一箇年の寺小屋の謝儀が充分でありました、其時代の謝儀は五節句と稱へる口に二錢づゝ持つて行くのが通例でありまして、一年に十錢あれば、寺小屋の謝儀が充分でありましたから、二十五錢あれば紙筆までも足るのであつた、加之親が房楊枝といふものを内職にいたすので、それに光澤を付けることは子供にも出来るのでありまして、寺小屋から歸れば其磨きの手傳をしました、百本磨くと親は必ず四文、青錢一つを呉れました、それは其時代の子供としては、かなりよき收得であつたのであります、それを以て或は筆を買ひ或は墨を買ふ様にして、トウ／＼十四まで繼續したのである、故に初

て伯父が机、其他を調べて寺小屋へ入校させて呉れまして、又大伯母が毎年暮から春に掛けて雇つて呉れて二十五錢を呉れ、親が日々に四文づゝ呉れたので寺小屋丈の修業を終つたのであります、之を要するに寺小屋を終るまで着物と食料とは親から貰ひました、が其他は皆さう云ふ様な順序を以てやつたのでありますから、甚だ不充分なる教育を受けたものであります。

先生の細君に對する感謝

第三に記憶して居るのは私が寺小屋へ行つて居ると、其寺小屋の先生は傍ら有志者に漢書の素讀をさせるのでありまして、私の隣席に坐つて居る安藤といふ者が非常に才子で、私と甚だ仲よく遊んだ者でありましたが、其人が又非常に物覺が悪くして、幾ら教へても些とも覺えない人であつた、私は隣席に居て教はるのを脇で覺えるともなしに大學一冊を覺えて仕舞ひました、其時に先生

がお前は是非素讀をいたせ、本も無くして人の教はるのを聞いて殆ど一冊を覚えて仕舞つたのであるから、本さへあれば確かに素讀は出來得るだらうと思ふから本は貸してあげる、是非共素讀をしろと申されました、私の父は非常に嚴格な者でありますから黙つて教はつては悪いと思つて、お師匠さんが教へてやると仰しやるから教はつても宜いかと親父に聴きましたらば、ならぬと言はれました、其事を師匠に申したら、其細君が態々宅へ来て、貴方の所の(鑄三郎と申しましたから)鑄三さんは屹度、讀めば覺える質だから教へたいと思ふ、月謝も何も要りませぬ、本も私の方でお貸し申すと申して來たのであります、其時親は大に怒つて、人の子を出來さうであるとか出來さうで無いとか言つて、批評するとは無禮な奴である、何を以て出來る出來ないといふ事が分つたのかと、親爺が怒りました、餘程親爺は質樸な頑固な人でありましたから怒つたのであります、其時に細君が少し御教へ申して見たが直さに能く御覺えなさると

申しました。父は尙怒つて、人の子に黙つて物を教へるといふ事は不都合であると申しました。私もとんでも無い事が起つてどの位親があとで私に小言を言ふかと思つて戦々競々として怖を懐いて居りました。其時代の叱り方は殆ど半殺しまでに擲るといふやうな事でありましたのと、今と違つて假令嚇かしてしても勘當をされると言はれる事が、子供ながら非常に可恐いのでありますから願へて居りました。所が其細君は親が此の如く申す事に付て少しも怒らないで誠に濟まない事をしたと言つて平身低頭して謝つて、さうしてトウ／＼親を納得させて私に素讀を教へて宜いといふ事になつて。それから素讀を教はる事になりました。私は長らく教育に従事して居る経験中にさう云ふやうな小言を言はれても悪口を言はれても謝りつゝ、人の子を教へるといふやうなえらい親切な熱心な人の事を想出して、自分の左程に親切で無いことを嘆くのであります。私は其先生の細君に對し忘れられないところの感謝を持つて居るのであり

ます。遂に其先生と細君の助に依つて四書五經の素讀を濟ませて幕府の規則に依つて素讀吟味の試験を受けて及第いたし、賞與として丹後綺三反を拜領いたしました。それが私の幼少の中に受けた第三の記憶であります。

十六歳の一月から全くの自活

第四に十五歳の十二月に昔の式に依つて元服をして、私の伯父大澤といふ者が、烏帽子親となつて、赤の飯を炊いて前髪を剃落したのであります。その時親は私に向つて、貴様は來年から十六になるのである、最早立派な大人であるから自身に押いで自身で生活しろといふ命令を受けました。其命令は甚だ遺憾の思をなしたのであります。何故ならば自分で既に十六になつたから言はれなくとも自活する積であつたのであります。乃ち十六の一月から自分で押いで自分で暮す、少しも親の世話にならない事を實行しました。其内職といふものは

極めて粗末なもので、其時代の貧乏士族の内職といふものは皆さう云ふものでありましたが、私は矢張り親の真似をして房楊枝を拵へてさうして一生懸命にかせいで月に一圓三三十銭位を得ました、其時代の内職で一圓以上得るといふ事は餘程の上出来の方でありました、大抵六十銭七十銭位ですら立派な男子が得られませぬのでした、私の親も矢張り一圓以上づつ得たのであります、筒様に私がかせぎて晝間拵へて置いて夜間になると小さな脇差を見えない様に挿んでさうして頬冠りをして新宿の小間物屋の店を「楊枝は宜いか楊枝は宜いか」と言つて賣つて歩くのであります、其楊枝を百本づゝ束ねるのに周圍に良いのを列べて内へ悪いのを束ね込むのが一般の習慣でありましたが、私はそれがどうしても出来なくて、悪いのは悪い、中位は中位、上等は上等といふ風に分けて賣りましたから、買ふ者が大層に便利を感じて、縦し自分の店に賣る者が切れても私が賣りに行くのを待つて居りまして、言ひ値で買つて呉れま

したから、私は大層便利を得て拵へた物が賣れないといふ事は決してありませんでした、其時代は賣りに出て残らず賣つて歸るといふことはなかく六ヶ敷のでありましたが、私は持つて行きさへすれば直ぐ僅かの時間に賣れて仕舞いまして、少しも困りませぬでした。

揚子原料の買出しと侍の體面

其間に随分滑稽な事もありました、其楊枝の原料は、日本橋の西河岸で買出すのであります、米俵位の大きさの物を二把買つて人足に頼んで搬んで貰へば、一錢の運賃でありますけれど、其一錢を惜んで、晝間の中に大小を差して買つて置いて、日の暮るのを待つて大小をそれへ結び附けて其荷を背負うて西河岸から鎌倉河岸、九段を上つて市ヶ谷見附を経てさうして四谷の愛住町迄歸るのであります、其頃、今の招魂社の處に齋藤彌九郎といふ有名な劍術家の道場が

ありました、其時代に普通の道場は月に六回づゝの稽古でありましたが、齋藤の道場では毎日稽古があつたのであります、其頃は日々道場を開く所は齋藤、千葉、桃井の三ヶ所でありました、その齋藤彌九郎の稽古場の下にいつでも稻荷館が出て居りました、其時は既に青年で自活する身分になつて居ながら未だ理想が低かつたので、是非一度は稻荷館を喰つて見たいといふ希望を起したのである、一つが八文と言つて青錢二つで買へるのであるけれど、一月経つても二月经つても八文の餘裕は容易に出せぬでした、漸との事で大奮發をして八文出して稻荷館を買つて、日頃の希望を成就したやうな心地して往來で勿論夜でありましたからそれを喰へながら歩きますと、運悪く親に目付かりました、非常に小言を喰ひまして相變らず往來で鐵拳を以て擲られたのであります、武士が往來で物を喰ふとは怪しからん事である、武士の體面を汚すと言つて小言を申されました、私は其時武士であらうが侍であらうが人足の眞似をして

斯んな賤役を執つて居る時に立喰位するは何でも無からうといふ様な考へで居りました、いつも親が小言を言ふ時に母は慰めて謝つて呉れますが、其事には母も大層怒りまして我々が此の如き賤役を執るのは自活が出来ないからで已むことを得ないのである、けれ共、どんなに困つて居ても侍の家に生れた者は出来る丈け侍の體面を保たなければならぬのであると申されました、それは私のまだ軟い精神の時であつたから非常に感じたのであります、出来る丈け侍の體面を保て、出来ない事は仕方が無いのである、生活に困る爲に内職をするとか商人に頭を低げて金を取るとかいふことも已を得ない、併ながら出来る丈け侍の體面を保てといふのは大層宜い事と思つてそれは生涯忘れまいといふ考を起したのであります。

盆燈籠の下で讀書

此の如き困難の中で是非共少しく漢書を読みたいと思つて、親が早朝より夜十時まで夜業をいたしますから、私も其通りいたしましたして夜の十時に親が寝てから少しづつ、獨學をやりました、親は非常に學問が嫌いで學問をする位悪い事は無いといふのを眞實に信じて居つたのであります、即ち私が困窮の家に生れた者であるからよく内職をしなければ喰ふ事が出来なくなるだらうといふので、つまり私を愛する點から學問、讀書することを非常に喧ましく申したので、自分の性質學問が嫌いであつたのであります、其時代には無學の者は澤山ありまして、私の親爺なども矢張り無學の方で生涯の間に一度も手紙を書いたこともなければ帳面附けたことも無いのであります、其中で少しづつ本を読みますのですから頁を開くとき少しでも音をさせるると直ちに騒々しいから寝ろと言はれました、親は極めて嚴重な性質でありまして、自活をしると命令を下しましてから附木でも燈心でも油でも少しも使はせないで、私自身が皆な器々で別

にして買はなければならず、讀書する爲の行燈も一々自分の物で無ければ使はせないといふやうな譯でありました、夏の中は日が長き爲に夜業をいたさせぬ、夕方薄暗い時に藁を展て置いて夜燈を點けないのであります、それは油の儉約であつた、暗黒で藁は取れさせぬから明い中に取つて置く、さうして時が來ると潜り込んで寝るのであります、併し其頃は宗教上の習慣として盆燈籠と申して、斯る困窮の家にも拘らず、親は佛法信者でありましたから軒下に盆燈籠を下げました、私は其下へ每晚立つて、本を讀んだこともありますが、それは實に愉快でありまして、今だにその頃の愉快な感じを記憶して居るのであります。

十八歳初めて兵士となる

さう云ふ風にポツ／＼と漢書を少しづつ讀んで居る最中に、私の困難な有様を

幕府の旗本で深津彌左衛門といふ人が聞込まれて、私を呼んで自分の家の子弟に四書五經素讀の復習しろとたのまれました。幾らか報酬も受け、且讀みたい本は何でも貸してあげるといふので初めて世話になる様になつて、内職の方の分量を減じたのであります。其頃にまた攘夷鎖港の詔が出まして、天下の志士は差當り日本に来て居る外國人を一人も残らず殺して仕舞ふのが順序であるといふ事になつて、殺氣紛々たる時に幕府は徒らに在留外國人を斬ることは國際談判の累になるといふのでそれを防ぐ爲に横濱へ番兵を置くことになつた、其兵士にならないかと言はれて私も喜んで其兵士になりました。其時の給料は一日が二朱、今の十二錢五厘に當りました。其時の二朱といふ金は非常な大金でありましたから私は華族にでもなつたやうな心地がして非常な幸福に感じました。半月横濱に居つて半月東京に居るのであります。元内職して一圓二三十錢取れし身分から一躍して一日に十二錢五厘づゝ半月代りに貰つて加ふるに食料

も向ふでありまして眞に裕かな身分となりました。夫より半月横濱に居り半月は東京に在つて熱心に勉強することが出来まして、初て内職を廢することが出来ました。丁度私は十八歳でありました。これが私の生活の一大變化であります。

新宿より愛住町への移轉

話が少し前に戻りますが、私が生れました地は今の新宿停車場の傍であります。其頃は風俗の極めて低い地でありまして、袴を穿いて居る者などは少しも見ることがなくして、小兒の遊戯は錢打、面チ打と云ふやうなものばかりで、寺小屋へ行く者などは殆ど稀れであつたのです。デ、初め伯父の世話で新宿の入口の中根と云ふ寺小屋へ入門しました時など、其寺小屋には新宿の娼妓貸座敷の息子、娘子、又は引手茶屋の息子や娘子などが多く来て居て、非常に猥褻

な話をして居たのを聞いた。否、聞せてやるから聞けと云ふ風に聞かせられたことがある。此頃に至つて、里仁爲美、擇不處仁、焉得知、と孔子の言はれたことを思出し、私共の生立ちました方面が、如何にも低かつたことを思出すのである。して見ると是からも小兒を置く所は餘程注意せねばならぬと思ふて、私は前に申しました通り、極く無學な家庭に育つて、童子經、實語經、百人一首、庭訓往來、それだけの本を見ただけのこと、其他の書物などと云ふものは更に見たことも聞いたこともなかつたのでありましたが、其後十歳の時に四谷の愛住町と云ふ所へ移轉をして、そして前にお話申しました池谷と云ふ親切な寺小屋の先生夫婦の薫陶を受けたのである、其時生徒の内に袴を穿いて居るものを二三人見受け、實に膽を潰したのである、そして先生の家に澤山の本箱のあるのを見て、之亦非常に驚いたのである、今日になつて見ると孟母三遷の教へと云ふことは大いに感服するのであります。テその親切な夫婦の世

話で當時有名な戸川播磨守、筒井肥前守、川路左衛門尉などと云ふ幕末の有力な役人のことなどを聞いて餘程奮發心を起したことがありました、如何に此の夫婦が青年の心を勵ますことに意を用ひて居たかと云ふことは、今更感服するのであります。

穴を掘て預りの書物を埋む

それで私が十六歳の時でした、青山の左京大夫の邸から火事が出て、折しも非常な烈風であつた爲め、私共の家も其時全焼になつてしまつた、其時分私は内職に筆耕をして居たので、他からブツキレーと云ふ本を原本として預つて居ましたが、少年ながら自分のものは少しも介はないで、鍛で地に穴を掘つて、焼けないやうに其本を埋けて置きました、で先づ預かつた本だけ焼けずに済みました、今考へて見ると、其時に何にも外のことは考へないで、他人の預

り物を亡くしては濟ないと云ふことに熱心注意したのは、今に於ても私は大層自ら喜んで居るのであります。

家庭の感化は今に奢ることゝ懶ける

ことが出来ない

で前に申しました通りの家庭でありましたから、歌とか、詩とか、或は繪とか云ふものは少とも家庭の話に乗らないものでありましたから、随つて私は文學思想に極めて乏しいのであります、然し如何にも両親は一剋で貧に安んずると云ふことゝ、儉約・勉強と云ふことに就いては、世間で驚かないものはなかつた位ですから、小兒の時から受けた家庭の感化は私の天性となつて、今日になつても奢ると云ふことゝ、懶ると云ふことは出来ないのです、之は家庭の賜物として、頗る感謝して居るのでございす、先年私は京都府下の丹波、丹後

の方を歩きました、其時に不圖以前の生活程度を思出したのであります、それは丹後の農家で午勞の葉を蓆の上に乗べて乾してある、何にするかと聞いて見ますと、糯米の不熟や粉米の極く悪いのを粉にして餅に春く時に、その午勞の葉の乾したのを入れて春くと能く粘つて餅に固まると云ふことを聞いたのである、私の十六七歳の時は邸内に畑を作つて澤山ではないが色々野菜を作つたもので、自家で作つた午勞の軸を茹て始終飯の代りに食つたこともあるし、又ヒネ赤豆と云ふ蟲の蝕つた極く安い赤豆を買つて来て、之を食料としたこともある、又甘藷の屑を買つてそれで飯を凌いだこともある、如惣生活の有様が一年や其處らではなかつたが、その非常な困窮の裡に在つて、両親は他人から金を一錢でも借りやうとしたことはいない、困ると云つて泣事を云つたこともないのでありますから、矢張私も金銭と云ふことに就いては、何等の欲を起したことはないのであります、圖らず午勞の葉の乾したのを見て、往昔の生活の

程度の低かつたことを思出したのであります。

貰つた給料と妹の衣服

扱て話しは前に戻ります、十八歳で私が兵士になつて一日十二銭の給料を取るやうになりましたが、其頃の習慣として息子株に居る時は、幾ら給料を取つても自己の自由に使はない、そつくり取つた給料を親に出すと、親は其内から小遣として幾らか分けて呉れる、つまり獨で自由にすることは出来なかつたので、自分でも自由に使はうとは思はなかつた、私には妹があります、今日も存生で居りますが、之も私も同じやうに池谷と云ふ寺小屋へ行つて、妻君に綿を紡ぐことを教へて貰つたものですから、女ながら矢張り月に五十銭や六十銭は儲けることが出来ました、それで自分の木綿の着衣位の代は獨で獲て居りましたが、私は妹は嫁にやらねばならぬものと思つて、私は親から分けて貰ふ給

の内を節約して、妹に相當の衣服を拵へてやつた、今これを考へて見ると、然う云ふ風に無邪氣に妹を愛すると云ふ氣が何うしてあつたかと、今も嬉しく思ふのであります。

老人の友達が多かつた

憇の如く兵士をして給金を取り、それを父に差出す、父から小遣を分けて貰ふ、その内から妹に衣服を買つてやると云ふ様な事をして居りましたが、其頃尤も私の氣に懸つたのは外國のことで、互國條約書と云ふ甚だ粗末なものです、之を全部寫して持つて居た、で屢々慷慨なことを云つたものですから、親と同じ位の年輩の人が能く話しに來ました、安藤太郎さんの親父さんで文澤と云ふ人などは、自分の孫のやうな私の所へ始終話しに來て居られた、此の文澤と云ふ人はなかなか人物で、其當時最も流行るお醫師でありましたが、或時私

の隣家に急病人があつた、急いで文澤先生を聘に行き、家人は門を出て先生の來着を待つて居た、先生は使を得て早速診に來たが、衝と私の家の門を入つて、私の部屋と云つて極く穢い所ですへ來て、塵だらけの所へ座つて話を始める、私は隣家に急病人があつて貴下を聘に上げたのではありませんか、何故隣家へお行でなさらないと云ふと、お前の顔を見ぬ内は脈も診えぬと戯言を云はれた、それ程に私とは親しくして居りましたが、年齢から云へば恰で私は孫のやうなものです、之に就いて可笑な話があります、餘程以前のことですが、安藤太郎さんが、伊豆の三島へ禁酒演説をしにいつたことがある、私は太郎さんとは心安くありませんが、親父の文澤さんとは極く近い間柄でしたから、丁度其時沼津に居りましたので、三島へ太郎さんを訪問に行きました、太郎さんは喜んで私を迎へましたが、不圖私の顔を見るや否や、如何にも無愛想な顔をして引ッ込んでしまつた、私は妙なことをすると不審に思つて居ますと再び

出て來て、貴下が江原さんですか、實は親から能くお名前を伺つて居る、親の友達であれば餘程のお爺さんと思つて居たのに、餘りお若いので大きに失敬したと云ふことでした、之は一例ですが其當時の交友は老人が多かつたのです。

初めて蘭書を読む

それで私が兵士の時分に、今ならば下士官、少尉と云ふやうな役に當る者は、皆な長門練兵書と云ふ本を持つて居た、之は千八百五十七年の出版で、歩兵の操練書である、それを村田藏六……大村兵部大輔、あの人が翻譯したものである、その本に據つて兵士を操練するのだが、昔のことで教育が今日程進歩して居らぬ、士官と雖もロクに新片假名を讀めない、兵士は猶更讀めない、私は幸に新片假名以上のものも何うやら憊うやう讀めましたから、その本を借りて讀んで見ると面白く能く釋る、釋るけれど一つ慾が出て寧ろ翻譯書を讀むよ

り原書を讀んで見ねば可ないと思つて、始めて蘭書を読み始めました、其時は怪しからんことだと兩親も叱言を云ふし、漢學の親友なども足下の品格に於ては充分尊敬して居る、併し足下が蘭書を読むことを止めねば交際も致し悪い、足下を愛するから忠告する、外國の書を読むことは止めたら宜らうと云はれたが、私は別段氣にも留めなふで勉強して居りました。

擊劍の免許と初めて酒を飲みたる事

それから私は武士として劍術は學ばねばならぬと思つて小兒の内から心に懸けては居りましたが、先生の所へ通ふと云ふ暇はありませんでしたから、極く重い木刀を拵つてそして夜寐る前に木刀を數百度振つたのです、つまり腕を強くする爲めであるが、冬などは炬燵は勿論ない、家は荒壁で、戸も壊れて居る、夜具は甚だ薄いで汗の出るまで木刀を振つて寝ると非常に温かて能く眠れる、

憊う云ふ風にして腕を鍛えて置きましたから、偶々劍術を使つて見ると、滅多に向ふを打つことは出来ないが、當れば骨も破れる程に痛い、だから誰にも厭はれて居ましたが、兎に角齋藤彌九郎の稽古場で免許を得ることになりました、其時今の渡邊昇さんが塾頭をして居て立會人になられた、一寸餘計なことを云ふやうですが、一つ記憶に残つて居ることがあるからお話し致しますが、免許を與へた時には先生がその弟子に御馳走する、弊袴を穿いた、袖腕に至ると云ふ風の人が酒を酌いでくれる、私が御馳走になつた時に、お前は甘い方がいゝか、辛い方がいゝかと聞かれたから、見ると白いのが甘い方だ、大方白酒だらうと思つて、甘い方をと云ふと、何を圖らん、それが醪酒、甚い香ひに僻易して辛い方をと云ふと、常の酒を酌いでくれた、私は餘私酒を飲ひ性質と見えて、三杯、四杯、五杯も飲んで、いざ立たうと思ふと腰が抜けたと見えて立つことが出来ない、大きに自ら驚いたけれども、暫くして居る内に再び立つことが出

来た、デそんな不體裁なこともなく暇を告げて歸りましたが、始めて猪口を口にして腰の抜けるまで飲めると云ふことは、酒の方では先づ性が善い方と見え、それより家では少しも飲みませんが、友達などと月に一度或は二度と云ふ風に酒を飲むことを覺えたのである、之は實に悪かつたと今更悔ゆる譯であります。

講武所の教授方

其後横濱の兵卒が廢されたに就いて私は給金を放れてしまつた、横濱警衛の爲め外に兵隊の組織が出来ましたので、私共如き士族の有志者から成立つ兵を廢したのである、私はかり廢された譯ではない、併し又自ら働かねばならぬ、丁度少し習ひ始めた蘭書が讀めると云ふ程でもないが先づアベセ位は分るから、和蘭書の筆耕を始め、それに據つて衣食し、そして幾分か勉強を續けて居りま

したが、二十二歳の時に幕府の講武所(今なら兵學校)の教授方を命ぜられました、その時代の教授方の給料と云ふものは二十人扶持と云ふので、一人扶持が一斗五升でありますから、月三石の米を貰ふやうになるので、今までと比べて非常に立派な生活をするのが出来たのであります、併し其時には筆耕其他の爲めに餘り身體を使ひ過て病氣に罹りました、随分大病であつた、けれども幸に教授方の給料がありますから、もう充分に藥を飲むことも出来、凡そ六ヶ月程の内に恢復したのであります、若し之が筆耕して辛うじて活路を得て居た時に大病に罹つたなら、或は藥料手當に事を缺いて死んだかも知れません、給料を受けるやうになつてから病氣に罹つたので幸に全癒することが出来た、實に人間と云ふものは不思議なものと考えるのであります。

西洋流練兵の幼稚さ加減

病も癒りましてから佐久間象山の塾に入りたいたいと思つて居りますうち、象山先生は京都に召されて居られなくなり、その後を矢張松代藩の有河賢之助と云ふ人が引承けて居りましたから、その塾に入塾しました、之が非常の物議を招いたのである、幕府の者は徒らに外面を飾つて、藩士と云ふものは大層自分と遠ふやうに思つて居たので、幕府即ち公儀の講武所の教授方と云ふやうな名譽ある人が、藩士の塾にはいるといふことは體面を汚す、甚だ怪しからんことだ、之迄塾に居つた者が教授方になつたら退塾すべき筈だ、況して始めから教授方でありながら入塾するに至つては甚だ其意を得ぬと云はれた、けれども、私は塾費がないから今迄入塾しなかつた、漸く餘裕を得られるやうになつたから入塾したので、私は非難を斥けて入塾し、塾から講武所に通ふて居りました。それで慶應の始めに將軍家茂のお供をして大阪に上り（其時分は今と反對でその下りを上りと云つて居ました）廣島に行き、出雲岩見を廻り大阪に歸りました。

たが、其頃、私共は自分の兵を一中隊率ゐて居ると共に、幕府の多くの兵隊に西洋流の練兵を教へて居ました、幕府は諸藩より西洋流が開けて居りましたけれども、未だ半信半疑の人が多かつた、銃隊と云つて鐵砲ばかり持つ隊もあれば、弓を持つ隊もあり、刀、即ち抜刀隊もあつた、その銃隊に組れた者の内に何うも西洋の鐵砲は命中が何うであらうか、何卒和流の筒を持ちたいと願つた者もある位で、幕府では總て銃隊に西洋流の銃を持しましたが、私の知つて居る國學者の葉若と云ふ者は據ん所なく西洋の銃を擔ぐには擔いたが、其の筒に火繩をかけて持つて居る、その火繩を何とすると聞いて見ると、若し管の發しない時の要心だと眞面目臭つて答へたことがありました、以て其の時代の日本の砲術の幼稚なことが分るのであります。

弟の爲めにした苦勞

私は大阪に長く居て慶應の末年に江戸に歸つて來ましたが、大阪、廣島わたりに在勤して居りますと、相當の手當を受けますので、教授方としての給料は少とも使はずに置きました、所が私の弟が非常の才子で、親の質朴なのに乗じ、巧みに嘘をいつて親を瞞し、私の蓄へた留守の金は皆な弟に使はれてしまつたので、その弟の爲めには長い間、絶えず苦しみを受けて、年中弟の爲めに辨金の勞を執り續けましたが、つい五六年前に弟は死にました、併し私は然う云ふ風に嘘をついて使はれても、少しも怒つたことはなく、實に不屈のこゝろは思ひますけれども、親に對して厭味らしいことを云つたことはなく、不足も云はないで、長い間その辨金をして來たことは私は今になつて非常に喜んで居るのであります。

頭取即ち今の歩兵大尉となる

私が二十四の歳、講武所と云ふものは廢されて、私は今の言葉で云へば歩兵大尉の役になりました、此の大尉になりましたから、私の生活に就いて大いなる變化を起したのであります、話が少し横にはいりますが、文化の開けない時代にありましては、少尉、中尉、大尉、少佐、中佐と云ふ堅苦しい語を用ゐると云ふことは思ひも據りません、それ故に今日の少佐に當る者を頭並と云ひ、大佐に當る者を頭と云ひ、大尉に當る者を頭取、中尉に當る者を指圖役、少尉に當る者を差圖役並、下士に當る者を下役と云ふ名を用ゐて居つたので、併しその時代から大佐、中佐、少佐、大尉、中尉、少尉、軍曹などと云ふ名稱がないではない、高野長英の書れたと云ふ歩操規範と云ふ本にはそっくりその名稱が用ゐてゐる、大方今日はその時代の字を用ひたのでありませう、それだけ文化が進んだのであります、テ私が大尉になつて始めて普通の歩兵一中隊の指揮官となり、再び京都へ登りましたが、間もなく翌年、御一新の騒ぎとなつて一

の働をしたのであります。

撤兵隊長となる

さて前にお話いたしました通り歩兵の差圖役頭取になつて京都へ上りました
が、私は撤兵隊の頭取となつたのです、其時代の兵制は一大隊が五中隊より成
り、その内の一中隊を撤兵隊と唱へたのであります、今日の如く兵士の普通教
育がありません故に、或は哨兵、或は番兵、斥候の如きものは何の兵にも出来
る譯ではなくして、一大隊の内から二小隊選抜して、それに重なる勤務を命ず
るので、兵隊の内では名譽ある隊であります、その時代は歐羅巴各國ともに皆
然う云ふ組織でありました、併し普通教育が進歩すれば凡ゆる兵士がどの勤務
にも使へることにならうと云ふのが、その時代からの理想でありました故、今
日は然うなつたのであります、私はその撤兵隊長となつて同じ一中隊を預つ

ても、幾分か名譽の地位にあつたのであります、勿論之は技術が幾分か入るの
のであります。

京都に滞在中は會津の先公から御依頼を受け、同藩の士族の歩兵、砲兵の練兵
を教授しましたが、私は元身分が低い者であつて、馬に乗つたことがありませ
ん、幸ひお前さんの方の練兵を教へる代り、乗馬を教へてくれと申し、専ら乗
馬を學びました、此時少し滑稽な失敗をしたことがありました、馬場で乗る時
に餘程上手になつた積りでありましたが、或時、聯隊の操練をするに會津の人
が大隊長をして、私が聯隊長でありました、會津の人は徒歩で號令する積りで
ありましたが、大隊の號令は騎馬でなければいかん、聯隊長は勿論騎馬でなけ
ればならぬから、馬を貸せと云つたところが、馬の先生は餘程躊躇して貸すこ
とを拒んだのである、私はその時一向氣が付かない、到頭馬を借りて乗つて見
ると馬は少とも動かない、常に私に乗り好い馬を貸してくれたのであります、

馬のことは馬の先生だから能く知つて居る、いつも馬場を乗り廻す馬は私にも乗り扱せる馬を選んで貸してくれたので、この時は私に乘れるやうな馬がなかつた、だから先生躊躇して貸さなかつたので、如何に焦つても馬は更に動かさない、已むなく大隊長一人馬に乗つて聯隊長が徒歩で號令したことがありました、併しそんなことがあつても耻づかしいとも何とも思ふやうな未だ情操はなかつた、つまり馬を知らないから馬に乗れぬ、これから勉強せねばならぬと云ふ考へを持つて、益々馬術を熱心に學びました、慥の如くして居る内に交代の時期が來ました、私に屬して居る兵は皆な非常の喜びをもつて江戸に歸つたのであります。

京都に留まりし譯及び故參の者にいじめられし事

その時私は自分の聯隊長たる深津攝津守と云ふ人に懇願して、何卒一人京都

に残つて居たいと云つた所が、深津攝津守の云はれるには、人は喜んで交代して歸るのに獨残つて居たいと云ふのは何ふ云ふ譯であるか、私の答へて申しましたのは、大政を御返上になると云ふことですが、その時に何かの感情の行違ひから衝突を來して兵亂が起らないとも云へません、その時に一臂の働きをしたいから何卒残してくれと再三乞ひまして、遂に京都に残ることになりました、けれども其時非常に誤解された苦痛を、今でも思ひ出すのであります、私はその時何にも疼しい考へも、希望もない、事に據つたら戦争があるかも知れない、その時は自分だけの働をしたいと云ふだけで、外に考へもありませんけれども、先方では何かそんなことを云ひ出したならば、京都に残つて居られるのみならず、一階級進められることでも出来るかも知らんと云ふ希望によつて願つた如く察せられ、お前が慥の如く残つてもお前の身分を引上げることには出来ないぞ、と云はれた時には、私は非常な苦痛を感じた、そんな劣な了見はない、勿論そ

の時に聯隊長は何う云ふ譯で戦があらうと云ふことを想像せられるかと聞かれましたから、それは小さい赤穂が潰れてもあれだけの騒ぎをしたのである、況や大きな幕府が、殆ど潰れると等しい場合には、どんな間違ひが起るかも知れない、その時出来るだけの働きをしたのであると答へましたが、私は幕府の極く柔和な人の集つて居る仲では、幾分か過激な性質がありましたと見えまして、誰にも厭がられて居た、それで江原は歩兵のことには熟練して居やうが、砲兵の方は、避易するだらうと、私を避易させる爲めに、砲兵の隊に送られた、ところが私は歩兵も砲兵も共に學んで居りましたから、矢張り砲兵の隊になつても外の隊と一向技術に於て劣ることはなかつたのであります、學術上のことでは寧ろ私の隊の方が優れて居つた點もあつて、大いに忌まれたのである、其時私を故參の者が虐めるに、馬で虐められたものです、四角の馬場を輪乗をかけるに、先に上手な者が乗つて歩きます、そして鎧なしで散々輪乗りに馴れた

時に、先方の者がヒヨイと方向を變へる、右へ廻つて居たものが左に廻ると、中心力を失つて馬から落ちる、私は自分を虐めるのだと云ふ考へは更になく、下手だから落ちると、憊う考へて、落ちれば乗る、乗れば又落ちる、幾度やつても一向平氣にやつたので、こんな奴はつまらない、馬で虐めるのは止さうと云ふ聲を後に聞きました、それで是迄私を虐めて居たのかと始めて知つたので、何をされても虐められるなど云ふ考へを起したことはない、併しその爲めに馬に乗ることは餘程進歩したやうに思ひます、其時が二十歳です。

佛蘭西寄贈の大砲を大阪まで運ぶ

其年の十一月に慶喜公が大政を御返上になつて、十二月再び京都を御出立、大阪へ下られたのであります、その時の有様は實に何とも云はれない狼狽狼藉の有様で、富士川の水鳥の羽音を聞いて逃げたと云ふ、平家の有様を其時に思ひ

淨べたのであります。戦さも何んにもないのに、何となく狼狽して逃げました。私は兵もなければ其時は附屬の隊もなくして、跡に残されたのです。で、ぶらぶら伏見まで参りますとナポレオン三世から幕府に獻納になつた當時最上の利器と云はれたナポレオン大砲が二門捨てゝある、外國の皇帝から日本の將軍に贈られたものを、往來に捨てゝ行くこと云ふことは日本の武士の體面に關する、之はどうしても大阪まで持つて行かねばならぬと云ふ考へが起りました、併しもう其時には薩長の兵が宿屋となく民家となく殆ど充滿して居りまして、殺氣紛々、觸れば斬らん有様でありましたから、不圖大砲を大阪まで持つて行かねばならぬと云ふ動機が起りましたから、左右に人の居ることも考へず、一向平氣で持つて行く積りでした、しかし大砲は車臺と砲身と外れて居ましたから、之を組み立てることは私の力では出來ない、丁度其處を通りかゝつたのが俠名天下に轟いて居る新門辰の乾兒達です、之、幸と其人に頼んで貴様達手傳つて

くれ、之は佛蘭西の皇帝から將軍様に贈られた大事の大砲である、此處に捨て置くのは江戸ッ兒の耻だから力を添へてくれると申しましたところが、喜んで手傳つてくれ、難なく之を組み立て、しまつた、新門の乾兒は元より教育はありませんから、世間の事情を探ることは知らずして、矢張り太平無事と考へて少しも驚くところはなく、大きな聲をして木遣りが、りで此の砲車を引出しました、誠に無邪氣なもので、各藩の兵も喜んで手傳はんばかりにして居てくれました故に、無事に淀まで引き、淀から船を頼んで積み込み、大阪まで持つて行きました、ところが十二月の末日、尾張の嚴定公、越前の春嶽公が大阪に來られて慶喜公に是非とも上京せらるゝやう薦められたで、上京のことに決りました、が、その時の先伴は會津桑名が参りました、幕府の歩兵も之れに隨いて参りましたが、元より戦ふ積りはない、普通の上洛の積りで虚心して行くこと伏見で發砲を受けた、直ちに敗走して引上げる、之より毎日、淀でも牧方

でも負けるばかりで、毎日のやうに死人を擔ぎ込み、怪我人を送り込むと云ふ有様、大阪城は頗る雜踏しました。

慶喜公大阪引上げの殿軍

其時私一人は、隊も兵も、持つて居らないが、その有様を見て大いに心配し、大阪の城へ参りまして今日の語で云へば陸軍大臣、その時代は陸軍奉行と稱へた藤堂肥後守に面會し、伏見以來、連戦連敗であるが、此の分で参りましたなら、明日か明後日大阪城へ官軍が迫るでありません、其處で大阪で一發でも大砲なり小銃なりを打つ様では大變である、今日は内亂を起す秋でない、外交と云ふ大問題を控へて居るから、大阪では少しも大小砲の音のしないやうにするのが、緊要である、故に將軍は江戸にお下りになつて、兵士を早く引上げ、ここで戦をしないやうにせねばなりません、併しながら官軍は破竹の勢を以て迫

るでありませんから、私に砲一座と歩兵一中隊を何卒貸して貰ひたい、然すれば立ろに守口に出張して大砲の布列る方面には砲臺を城き、歩兵の胸障を設けて之迄の如く容易く通路の出来ないやうにしませう、官軍は蓋し寡兵でありませう、疲れて居りませう、乍併これ迄連戦連勝で伏兵に會つたことも、盛返しに會つたこともない、寡兵で、疲れて、且つ騙つて居るから今宵でも別の兵を以て夜討を懸けませう、或は狼狽して先方で引上げるかも知れない、其間に大阪城を御引上げになるやうにと懇々頼願して、漸く一座の砲と、一中隊の歩兵を借受け、守口に参りまして見込の如く砲座胸障を築いて、充分死を以て殿をする積りでありません、ところが、果して官軍は容易攻めて参りません、居る内、將軍は一日になつて御引上、兵士も皆引拂つた故に速かに引上げよと云ふ命を受けました、故に私は砲兵歩兵を率ゐて大阪まで参りましたが、最早誰も居らず、寂寥の有様である、その時可笑いことが此に亦生じたのである私

の故參の差圖役頭取(大尉に當る)が随分私を慮めたが、その家來までが同じやうに威張つて、何かにつけて從卒のやうに引ッ使ふと云ふ有様であつた、其人が餘程深傷を負ふた、例の家來は從卒を使ふ氣になつて、擔架の丈夫なるもので、人足が擔ぐ時に搖れない、傷に障らない痛くない様なものと云ふので、私は世の中のことを知らぬ人と寧ろ如何にも氣の毒に感じた位で、とても此の大敗走の中で然う云ふことは出来ない、長く懸命を蒙つたことであるから私が今夜日が暮れたら介錯して上るから、お前は髪の水だけを持って江戸へ歸り、それを奥様に上げると慥う云つて置きました、で日が暮れたから首を落してやらうと其人の部屋に行つて見ますと、何ぞ計らん其人は歩いてであるか家來に負さつてゐるか、何處かへ行つてしまつたのです、その後江戸へ歸つてその人に會いましたが、實に奇抜な感じが起つたのです。

軍用旅費を奪はる

それで私は大阪に歸つて日の暮れ方に兵を纏め、砲一座と、兵一中隊を率ゐる泉州の堺へ参りました、堺へ着いて是れから草鞋を脱うと云ふ時に町の両方から火を付けられた、そして小銃の音が聞えます、その時私は兵士に命令を下して一人も口を利いてはいかぬ、銃に弾丸を込めて一刻も早く裏の畑へ出て整列しろと云ひましたら、家が焼けます火焔で明るいから立ろに整列が出来た、で間道から逃げて紀州路に行きました、幸に追ふ者もありません、如何にも無事でありましたが、後で聞きますと静肅であつた爲め伏兵でもわりはせぬかと、先方で引上げてくれたのださうで大きに僥倖でありました、この危険だつた堺へ行く途中、背後を振り返りますと大阪城が炎々として燃え上つて居ました、秀吉が智慧と、金と、敷奇を極めた日本無比の城郭も焼けてしまふのかと、甚だ

惜しんだことがありました。堺から落延びて紀州路へはいるや否や、銘々非常に空腹を感じたので、彼方の農家、此方の農家と入りこんで、飯を徴り集め、漸く飢を凌いだのです。併し自分は荷も隊長であるから兵士の残らず食つた跡でなければ食ふまいと覺悟したが、果して食ふものがなくなつてしまつた、直き粥を煮て上るから暫くお待ちなさいと云はれたが、非常に眠くなつて眠てしまつた、暫くして起されて粥を食ひ、その體を述べて二三町歩くと具合が甚だをかしく、氣が付いて見ると自分ながら面目ない油断であつた、歩兵一中隊と砲一座の旅費として二百兩の金子を持つて居ましたが、それを縮緬の胴巻に入れ二重に廻して肌着の下に締め、その肌着の上にはその時代のチヨッキ、ボタンの二十もあるのを着て居ましたのを、そのボタンを外され、襦衣を捲られ、その下に締込んだ胴巻から全然金を奪られ、元の通りチヤンとチヨッキのボタンまで懸けて置かれたのを少しも知らなかつた、非常に疲れて餘程能く眠たも

のと思はれる、之には随分困りました、どうも武士が軍用金を眠て居る時に奪はれたとあつては不覺千萬、武士の體面を汚したのであるから、どうしても腹を切るより外に途はない、と充分決心しましたが、本當の武士が腹を切るのは、腹を切るのが一番利益のある、今日で云へば最良と云ふ時でなければするものでないと云ふことを不圖思出して、多數の兵士を狼狽させるのは如何にも忍びぬところから、氣を取り直して紀州まで着きました。

紀州藩の狼狽と千兩の旅費

紀州へ来て見ますと幕府の者はもう一人も居ないと云ふ譯である、其處で仕方がありませんから僅かの錢で大きな松板を買ひ、和歌山の城下で一番大きな旅屋へ泊つて、公然とその松板に「砲兵差圖役頭取江原素六」と書いて表へ掲げました、すると逃げ損なつて彼方の納屋や此方の家に蝨んで居た人が集つて來

て立ろに多數になりました、紀州の方では大層驚いて、朝廷の方へは幕府の家
來は一人も居ない、皆退居を命じてしまつたと申し立てたので、翌日橋本侍從
が實地檢分に来つしやると云ふ時であつたので、私にそんな事をしては困る、
速かに立ち退いてくれと云ふ強談に人を寄せ越した、之は一つ間違へば紀州は嫌
疑を受けて五十四萬石が潰れるか何うかと云ふ場合であるから、強談するのは
當然である、其時私は紀州の使者に向つて、實に御道理である、しかし兵士
は士官の命によつて右向けと云へば右を向き、左向けと云へば左を向く、只だ
其命に服従する丈で大きい罪はない、どうか橋本侍從にお目に懸れるやうに
取斗つてくれ、兵士だけは官費で東京へ送つて貰たい、自分は指揮をした者だ
から其罪輕からざる者である、切腹仰付けられるなら冥加至極、縛首にならう
が今日否やは申しません、兵士だけは今日どうか公然と還へる様にしたと云
ひますと、そんな事は逆も出来ることではない、ないと云つて此方は外に途は

ない、では金をやるから立つてくれと先方で申しますので、私共は元よりそれ
が望むところ、では何卒金を下さい、先方では幾らあれば能い、と云ふ、一千
兩貰ひたい、當時千石船を差立てるには千兩の極め、其時分の一千兩は恐らく
今の一萬圓以上に當りませう、一千兩と聞いて一寸膽を潰したやうであつたが、
何卒一寸相談してくるからお待ちを、と云つて歸りましたが、暫て來て五百兩
では如何、と云ふ、私は一千兩が一兩脱けても立つことは出来ない、と云ふと、
又一寸中座をして立ち歸り、立ろに今度は一千兩くれました、其千兩を以て船
を頼んで和歌山を出帆することになりました、之は今考へますと私は書生から
成上つただけで、何も騙引や或は其他の智慧がありませんので却つて成功した
かと思ふ、何故なれば此時紀州の船持は千石積は千兩と云ふ同盟を組んで一兩
安くてもいけないのである、それで私は必要だけを請求した、若しなまなか船
は千兩であるが一寸雜用が入るから、千二百兩とか千六百兩とか貰ひたいと云

つたならば、先方でも値切るに違ひない、値切られて負けるとなると五百兩や八百兩は合せて負かされたかも知れない、然うすると船に乗れない、其内には旅屋の周囲を兵に圍まれて縛られたかも知れない、必要の外一錢も貰ふと云ふ考へがなかつたので、値切られても少しも猶豫なく拒むことが出来たので、先方でも動かすべからざることを知つて深く金を出してくれたのでせう、それで船へ入りました。

船頭への談判と品川への安着

乗つてから私は船頭と談判しました、我をば迎もない命である、官軍の軍艦に出會ひ發砲を受けて沈没しても元々である、併しお前達には氣の毒である、幕府の軍艦が逃げ損なつた人を集める爲めに來るかも知れない、若し途中で幕府の軍艦に會へば夫へ乗込み、然うすればお前達も仕合せ、私達も仕合せ然うな

つた時には半分船賃を返へしてくれないか、宜しうございませうと云ふので遂に約東濟となり、そちこちして居る内に風都合で紀州の橋杭港と云ふ所に碇泊して居る時に、迅動丸と云ふ汽船が來ましたので、それに乗移り、東京の船宿で五百兩の金を渡すと云ふことで、船頭からそれだけの證文を受取つて、海路無事に品川へ着きました。

品川へ着した時に私は始めて人情と云ふものを知りました、長い間船で窮屈な思ひをさせたから、品川へ着したら酒でも飲んでやらうと、海月樓へ私が先に立つて、少しく酒肴の用意をして迅動丸へ戻つて見ますと、京阪で抱へた兵士は居ましたけれども、士族の分は影も形もない、即ち東京に着するや否や、両親、女房に會ひたいので、酒や肴など云ふそんな考へはない、挨拶もしないで行つてしまつたのであります、私は血氣の青年でありまして、然う云ふ家庭的の人情と云ふものは深く知らなかつたが、此で始めて人情と云ふもの、偉いこ

とを研究しました。

そして数日の後、差圖役の高橋清十郎と私と同行して、船宿へ行つて五百兩を受取りましたが、その五百兩は上野の彰義隊へ軍用金として送つたと云ふ高橋からの報告を受けました、此の大阪を立ち退いてそして船に乗るまでの間は、只だ私は自身の責任を盡すと云ふだけで、もう餘念もなく働きました、其時杉浦静海と云ふ私の先輩の人も一所でありましたが、之は何ともしないので、金は何うしたか、船は何うした、と如何にも恚う第三者のやうになつて私に色々云ひ懸りましたが、私は矢張何とも思はないで出来るだけの仕事をしました、其後杉浦静海と云ふ人は、その時代のことを書いた漢文の日記を日本新聞に連日連載されましたが、第三者のやうになつて金はどう、船はどうと云ふ間に私の行爲を全然見ておいて、非常の稱賛を以て日記に書かれたので、日本新聞に出たその日記を見て、始めて彼の然う云ふ風に自分を見て居てくれたかと思つたの

でありました、私の當時の振舞を考へて見れば、只だ乗りかけた船だから出来るだけ自分の責を盡さねばならぬと云ふ考だけであつたのです。

撤兵頭並となりし當時の家庭

それから間もなく撤兵頭並と云ふ役になりました、撤兵頭並と云ふと今の少佐であります、當時幕府の風俗は役替をする時には、即ち召状と云ふものが来ます、然うすると親族故舊へ御用の儀は計り難く候へ共、今日御用召にて登城いたす、實に有り難い、と云ふことを手紙で知らせる、然うすると親族故舊は如何なる命を受けたのかと家へ多勢来て待つて居る、社杯を着た姿で當人が歸つて来ると、恚う云ふ役を吩咐つたと報告する、それは目出度と云つて祝盃を上る、即ち御馳走が始まるのである、ところが私の父は頑固で交際が嫌い、他から一度でも手紙を貰つたこともなければ、人が尋ねて来たこともない、私が友

遠と同行して居るのを偶々見られると、往來を二人で並んで歩くと云つて打擲する程で、私は滅多に往來を友達と歩いたことはない、偶々友達と同行すれば親に見られたら大變と云ふ心を有つて歩いて居た位で、撤兵頭並になつて歸つて來てもロクニ芽出度とも云はれない、私が親友、親族に通知することも一切許しません、ところが伯父に當ります小野と云ふ者が、私が撤兵頭並になつたのを非常に喜んで、どうも息子が芙蓉の間の役になつたのは此の上もない手柄である、早速喜びに來たと云つて尋ねてくれましたら、家では何の用意もない、私も幾分か不平でありましたから、早く夜具の仲へはいつて寝て居りました、私共は天井も何もない六疊一室と一坪半の土間があるばかりですから、その六疊に多勢寝るのです、其時親はまだ起きて居ましたが、伯父は大層私を賞める、私は横にはなつたがまだ眠りませんから能く話が聞えます、親と云ふものは思の外をかしいところがあるものです、親の云はれるに、伴は駄目です、

役には立ちません、只だ取柄は酒を飲まないだけでせうと云はれる、ところが私は此の前に申しました通り、齋藤彌九郎の道場で劍術の免許を受けた時に、始めて酒を口にするや否や、腰の抜けるまで飲みましたので、先天的酒飲の性質を有つて居る、親には秘密で至る所で澤山酒を飲んで居るが、親は一向酒を飲まないものと喜んで居る、私はその時腹の中では可笑かつた、世間の親も皆な憊う云ふ情有ありませんと思ひます。

そこでこの撤兵と云ふのは、幕府の旗本と云はず、御家人と云はず、青年から組織したもので、私は極く小身から俄かに頭並となりましたが、私と同時に上役の者が二人、頭並となりました、都合頭並が五人です、ところが五人の内で故參の者は善い兵ばかりを選抜して自分の隊に入れるので、五大隊に組織された内で、故參の者の持つ隊が一番善い、新參の者は五大隊の内が一番悪い隊を持つと云ふ風に組織がなつて居ました、私は新參の者であるから黙つて居りました

たが、或時ふと一言を發した、それは私のやうな小身未熟の者が大隊を指揮すると云ふことは却々大任である、各隊とも皆な同じやうに組織されたのではあらうが、若し不幸にして士官も兵士も劣るものでも引受けたならば、猶更責任を盡すことは出来ない、されば善い隊を買ひたいと云ふことは出来ないが、今日の場合には最早や新參故參の區別を流す時であるから、出來た隊を抽籤で決めるやうにしたい、と恚う云つた時に、一番故參の者が宜らうと云ひましたので直ぐ籤を拵へて引きましたところが、何ぞ計らん私が一番善い大隊の籤に當りました、兵も熟練なれば士官も立派なもので組織した隊を引受けた、そこで私はまだ世の中のことに暗いから何でも彼でも真面目でありました、當時のことですから私の隊に屬して居る者からも色々の建白書が出ます外の者は些とも之を見ない、鼻でも拭んでしまつたのですが、私は一つ残らず部下から出た建白書を丁寧に讀みました、その讀んだ内で古川善次郎と云ふ下士官が出したもの

は、色々善いものもあるが就中文も善く字も善く、趣意も善いから、本人を呼び出して會つて見たところが却々尊敬すべき人格をもつて居る、で私は立處にその人を少尉に擢ました。

切腹の覺悟と益田官軍參謀への引受け

して居る内に、官軍は愈々東海道を下つて來る、もう箱根に近づいたと云ふ時に、陸軍は何う云ふ方針を執るか、戦ふか、或は謹慎するかと、恚う云ふやうな協議をしたことがある、そして私は驚いて、今日はその協議をする場合でない、もうトウに決して居ねばならぬ徒らに議論をする秋でない、弱い者は却つて死して君恩に報ずるなど、云つて、驕がなければ強くないやうな有様であるけれども、官軍に向つて戦ひを交へる時代でない、戦ひをするのは悪いに決つて居る、しかし戦を避けるとなると臆病者であるとか、不忠者であるとか云つ

て私は立處に大勢の者に斬られてしまふ、人に斬られぬ先で菩提所へ行つて腹を切る積り、其處で私は尤も深く恩願を受けた深津攝津守の許へ参りまして何となく此世の暇乞をした、先方は一向感じなかつた、それから更に歸りがけに一軒、近藤眞琴と云ふ人の家に寄つた、攻玉舎の先生をして居る人ですが、此の人は非常の學者で算術なども大層出来た人で、無二の友達である、で此の世の別れを告げる積りで寄りましたが生憎留守でありました、已むなく机の上の紙へ、「慷慨就死易、從容就死難」と書いて菩提所へ行く途次、自家の前まで来て丁度上りかけたところへ近藤先生は驅けつけて来た、私が先生の家を出ると間もなく歸つて来て、晝置を見たものだから息を切つて飛んで来たので私の背後から君死んではいけぬ、君の力を盡さねばならぬ時と思ふから死を止めに来たと云ふことで、暫く話をして居るうちに、會津藩の林三郎が肥後藩の益田參謀を伴れて来て、私の積まない家に入りました、林三郎の云ふには、愈々時

日も切迫して官軍が箱根を越した時に、幕府の處置が悪いと悔いても及ばぬ、就いては一番官軍に於て懸念するはお前方に屬して居る撤兵隊である、その一擧一動は由々敷大事になると云ふので、幾分か官軍も躊躇して居る、幸ひ聞けばお前は其の隊に居る、肥後の參謀長益田君は全權を帯びて来て云はれるに、お前に一切隊の方を任せるから、輕舉暴動をしないやうにしてくれと慫う云ふことである、何卒お前も責任を以て引受けてくれと云ふ、私の力には及ばぬと辭退したが連りに進られるので、では宜しうございます、死を以て彼等の擧動は受合ひました、その時代謹慎恭順するならば兵器彈藥は官軍に渡さねばならぬのですが、益田と云ふ人はお前に任せる以上は兵器彈藥も官軍に渡さないで宜い、一切お前に任して置くと大層信用して喜んで歸りました。

撤兵隊木更津へ脱走す

撤兵の溜り所は西九下の廣い原、今あの楠公の銅像のある邊にありました。私
 は其處へ多勢を集めて大體の話をしたところが、私の説に従つて謹慎恭順の意
 を表し、決して輕舉暴動をしないと誓約したので、官軍の方でも大層喜んで満
 足しました。しかし私の名譽を妬んで兵を煽動した者がありましたので、五六
 日經つと私に斷りなしに兵は上總の木更津と云ふ所へ脱走した之は明治元年の
 三月十日であります。兵が私の云ふことを聞いて一步も動く筈ではなかつたの
 に、餘り不思議に思ひましたから、能く調べて見ますと、兵は江原の命でなけ
 れば一步も動かぬと云ふのを、江原はお前方より先に行つて準備をして居る故
 に一同を率ゐて速かに脱走したと云ふ命令書が来て居ると欺して伴れて参りま
 したので、私は大きに驚いて、欺して伴はれて行くとは怪しからん、殺氣が立
 つて居る時だから、欺した者の首を斬るなど、云ふ騒動が起るかも知れん、之
 は捨て置けぬと思つて善後の策を講ずる爲め私も跡から上總の方へ行つたので

あります。私は總の如く官軍から相當の信用を受け、兵士も私の云ふことを聞
 くので幕府は私を大佐にしました。けれども今や兵士同僚は兎に角忠臣の精神
 を以て死を決し、脱走して居る。その跡に残りて己れが出世すると云ふことは、
 極めて悪いことであるから切なる願ひをして大佐を辭職し、そして元の少佐に
 なつて上總へ参りました。

上總へ参りましたところが、既に官軍に勝つたもの、やうに、要害に兵を配ら
 ず、夜でもなければ番兵を置いてない、如何にも狼藉千萬である、故に私はそ
 れぞれ兵を配置し、近傍、交渉し、小さな藩々と談判すると云ふ風にして、色
 色手分けをして整理を付ました。けれども俄に戦争と云ふことはいけな、朝
 廷でも會津のことに就いて非常の苦心されて居る、會津の爲めには全軍を盡す
 に相違ない、其時背後から襲はれては大變と云ふ考へもあらうから、今こゝで
 手出しをするといけな、と色々注意して置きました。しかし木更津と云ふと

ころは要害の悪い處であるから、兎に角連絡の近い方に方向を變へねばいけな
いと、遂に市川、八幡と云ふ方面に兵を移しました、所が官軍の方は憤つて
今にも射懸らうと云ふ様子が見えますから官軍の上總方面の參謀長をして居る
小野田藩の林鐵之丞と云ふ人に交渉し（此の人はよく分る人で、足利の木像を
破した連中でありませう、後に立木兼善と云ひました）兩方とも過激のことを避
けて無辜の血を流さぬやうにしたい、と云ふと林も承知してお前に任して置け
ば輕率暴動もないから、兵器彈藥も取上げない、一切お前に任して置くと安心
して先方から任してくれましたのです、しかるに幕府の家來の内、故と林の所へ
行つて、是非とも江原の隊の兵器彈藥を取上げねばいかぬ、然もないと外の方
面の脱走兵も此の例に倣つて謹慎を表する爲めに必ずしも兵器彈藥を渡さぬや
うになる、是非江原の隊のも取上げねばならぬ、と慫う云ふ風に味方の者の内
で官軍に迫るものもある、若しも貴下がそのお考へなら私が説得して取り上

げて御覽に入れる、と己れ朝廷へ奉公でもする時の土産にしやうと云ふ連中が
澤山ある、或時、一人の者が如何にも傲慢に私を見下げて説得するやうに云ふ
から、こんな者に逆つては斬るとか斬られるとか云つて、怪我でもしては詮ら
ぬと人が悪いやうではあるが同僚の益田直八郎と云ふ人の所へ遣つた、此の人
は腰幹も大きし、一寸酒などを飲むと亂暴の人であるが、私は何うでもい、
益田の所へ行つて意見をお述べなさい、益田さへその意見ならと益田の所へ
遣ると、果して益田は一刀の下にその増好とか云つた男を斬つてしまつた私
が手ら斬らんで益田が斬つてくれた。

我隊の全勝と敵隊長との組み討ち

けれども幾らと然う云ふ人がやつて来て、江原の謹慎でなく、官軍の謹慎だと
云ふ風に彼等を罵詈したのだから、遂に林は私に如何にも同意を表して居

たが、他の方面から私の兵を撃たねばならぬことになり、愈上戦ひが始まると云ふことで、兵を配置すると先方から打ち込んで来た、其時は各所とも大丈夫の準備がしてありましたから、見事に勝ちました、殆ど全勝を得たので遂に市川の渡まで参りました、市川の渡に参りますと藤堂の兵が大砲を置いて逃げました、所がその大砲を見るとシャツカリンも外してあるし、撃鉄も外してある、けれども火門針が打込んでない、撃鉄もウレーシングパイプも彈藥箱の中にあるのを丁んと知つて居るから、探して見ると果してある、それを組み立て、刀の下緒でウレーシングパイプを取つて敵側の鐵砲で見事に敵を打ちました、然う云ふ鹽梅に成功したものの、猥りに追ふと宜しくないから、兵を集中する爲めに聲を濁して制し、再び八幡の船橋の方へ集中することになりました、しかし外の隊は見事に負けてしまつたので、影も形もない、蜘蛛の子を散らす如く散つてしまつた、それでは仕方がないから方向を轉じて隊伍を纏め、銚子に行つ

て銚子から水戸の方へ行く積りで方向を轉じて靜かに歩きました、戦は決して逃げるのは恐くはない、追ふ方が恐い、伏兵があるか、どんなことがあるか分らない、私は一向狼狽しない、方向を變て行くと、其處で福岡の兵に出會ひ丁度十字火の内に陥りましたが、好い鹽梅に背後に控へて居りましたから、河の側面に出たさきりで逃げました、その時に一人、筑前の藩の隊長で、小倉と云ふのが何う云ふ譯だか私を識つて急速に突貫して来ました、私は彼が刀を抜いて斬る間もなく、その小倉と云ふ人に飛びついて、組打をした所が私の方が遙かに弱かつた、立處に組伏せられて、私はもう組伏せられた以上は泡を食つても仕方がない、自分の味方が来れば助かる、先の味方が来れば殺されると決つて居る、幾ら焦つても仕方がない、下から兩手でもつて短刀の束を押へて居るだけである、先方も却々呼吸を見計つて直ぐ刺さうともしなかつた、その時前に申しました指圖役の古川と云ふ人が飛んで来て、「お頭、怪我はありません

か」と突如刀を抜いて斬らうとしますから、私は下から斬つては困る、鐵砲の
盛尻で背中を強く打てと云ふと、古川は盛尻で敵の背中を打ちました、脊髄が折
れたか何うかして目を廻してしまつた、私は股から這ひ出して危ない命を助かつ
たが、憊う云ふ時には不思議なもので上の人が斬られると澤山血が出て己れの
衣服が汚れるだらうと、極く瞬間に、そんな優長な考へが出て、斬つては困る、
打つてくれと云つたのです、然うすると兵士が四五人飛んで來ましたが、先方
が死んで居るから安心して鈍刀でその人の頭を三四度斬つた、頭は堅いもので
すから只筋を付けただけですが、それが活になつて小倉と云ふ人が動き出した、
死んで居る積りの人が動いたから兵は驚いて逃げ出した、すると流石に九州武
士の性質を起して、腹を切らうとしたが手が震へて何うしても切れない、古川
が御介錯申すと刀を抜いて斬つてやつた、そしてそのことが濟ひや否や、己れ
隊長の仇と敵は盛んに盛返へして來て、私を狙つて撃つた撃つた、非常に撃つ

たので左の足に三發の彈丸を受けて私は歩くことが出來ない、兵士が多勢、私
の側に集りましたが、多勢來ると的になつていけない、と二三人の者と古川と
に擔がれて八幡の百姓家に伏れることになりました。

長持の裡への潜伏と銃創の手療治

官軍は其後毎日探しに來る、何うも知れませんが、之を以て見ますと、人間が本
當の眞實を以てすることは恐ろしい力のあることが分る、熱心に探したが遂に私
の在家は知れませんが、私の方は動けないものですから私を小さな長持のやうな
中へ入れて、裏の畑の畦のやうな所へ持つて參り、幾分か土を掛けて置いたの
です、其時結飯を丁んど入れておいてくれました、私は埋められては大變だか
ら蓋の間へ小さな石を挟んでおいたから空氣の流通は澤山ある、其中官軍の方
でも探すことがなくなりましたから、村の者が出て來て自分の宅へ私を運んで

くれました。其時傷を見るともう夏のことでありまして、非常に腐敗し、膿の出ることは恐ろしい、百姓の人は私を介抱してくれたが其の傷を見ると眞青になつて逃げてしまつた。和蘭の書を讀むには醫書を讀むから、私も外科のところを讀んだことがある、静脈を切れば恙う云ふ風に血が濺ぐやうで、動脈を切ればどくどく出ると云ふことや、それには應急の手當をせねばいけぬ、清い水で能く洗ひ、綿撒糸で縛ると云ふことを能く記憶して居る、其時代は怪我は總て焼酎で洗ふと云ふ時代で、新らじいことを聞くと非常に能く覚えて居る、で自分は力を極めて膿を搾つて、綿撒糸を拵へて縛り居りました、けれども股を打抜かれた所などは非常に腐りました、小さな筋は確かに切れたに相違ない、併し一つの筋が切れれば他の筋が肥つてくれる、植木の根が切れると切れぬ根が肥る、健康に障りはない、が若し治るまで足を曲げて居て、曲げたままで筋が肥ると跛足になると思つたから、絶えず我慢して足を伸して居りました、

其内に寝返りくらゐは出来るやうになり、段々起返へることも出来るやうになりましたから、其處から下り船を頼んで、夜中に新場へ行き、新場から牛込の揚場に着き籠に乗つて愛住町の六疊敷一室の我家へ歸りました。

官軍搜索の虎口を逃る

其時代の習慣として、目的者が一人居ると、罪があつてもなくても下女下男小供迄、慰み半分で斬殺す時代で、官軍でも江原の家だと云ふので非常に探す、甚だ險着でありましたから、自分は仕方がないとしても家族に累ひを掛けるのは忍びぬと考へて、石井至凝と云ふ私と極く惡意な人で、今の永田町の大藏省の官舎のある所に居ましたが、其所へ潜伏する爲に籠に乗つて行きました、市谷で調べられました、籠を開られると知れた人が居る、尾州の士官で近藤眞琴に數學を學び、蘭書も讀んだ人ですが、親友であつたので見ない風をして通して

くれ、虎口を逃れて石井の家に潜みました。所が石井の所も物騒になつたので、石井の家を出て他へ参りましたが、私が出た翌日、果して石井は家宅搜索を受けました。幸ひ私が居りませんから亂暴もせずに官軍の兵は引上げましたが、若し私が居たなら私の首がないだけでなく、石井の一家も斬られたかも知れない、僅か一日の違いで石井も災厄を逃れ、私も首を維ぎました。之から先私の行先きは次に申し上げます。

金錢に關する奇妙の運命

私の負傷は追々全快に赴きましたが、私の役目は脱走をした爲めに免せられました。此時に又金に就て奇抜な問題が起つたのであります。其時代の頭並、今日で云ふと少佐ですが、其年給は一千圓でありました。今の千圓は僅なものでありませんが、其時代の千圓と云へば大したもので、先づ今の十倍位の價値の

あるものでありますから、頗る大金でありました。併し僅か一ヶ月の間に脱走をしたり、戦争をしたり負傷をしたり、其上免職になりましたから、一ヶ月分の給料ならでは得ることが出来ませぬけれども、それでも其給料は大金と思ふて、心密かに當て込んで居りました。然るに一ヶ月分の給料は會計課が私の自宅に届ける時に、五拾圓を差引いて殘金を届けて呉たのであります。それはドウ云ふ譯かと思ふと、私は上總方面に出掛ける時に用意として會計課から五拾圓受取つて参りましたが、私は負傷をして長持のやうなものに入れられて山に運ばれると云ふ境遇でありますから、先づ十中八九は助かるまいと云ふ處から、官金は返して置く方が宜からうと云ふので、下僕の小三郎と云ふものに渡して於前は江戸に歸つて、是を宅に届けて、さうして是を速かに會計課に届けるやうに傳言しると申付けて渡して置いたのであるから、其金は會計課の方には届いて居つたものと思ふて居つた、處が五拾圓の差引勘定をされた處で、初

めて其金が届かなかつたことが分つたのでありました、そこで考へて見ると其
小三郎と云ふ奴は私が逆も助らぬ、死ぬものであると考へて居るから、自分が
着腹しても知れないと思ふて、是を取つて仕舞ふて届けなかつたのである、處
が小三郎は不意に尋ねて來ました、私が生きて居つたので大に狼狽の風が見
えました、其時には私も狼狽しました、何せかと云ふと小三郎が己の悪事を覆
ふ爲めに官軍に密告されるならば、直ちに私の首がなくなるから、直ぐ私はニ
コニコして彼の機嫌を取りつゝ、今會計から貰つた金の中貳拾圓を出して彼に
與へて、さうしてマア斯う云ふ風に生命は助かつたが、是から先きドウなるか
分らぬが、必ず遠からず太平になるのである、故に貴様は幸ひ甲州のものであ
るから、國へ歸つて、是から生糸とか、養蠶とか云ふやうなものに力を盡して、
人民一般が金を拵へなければならぬ場合であるから、今から養蠶にでも従事し
たら宜からう、是は少しばかりだが歸りの費用として持つて行くが宜いと云ふ

て遣りましたから、小三郎は自分の悪事が知れないと思ふて、其金を押戴いて
暇を取つて歸りました、後にて聞けば彼は笹子峠を通る時に、官軍に捕へられ
て、其五拾圓と二拾圓の金があつた爲めに、皆な官軍のものに取られて、其上
に首を刎られたと云ふことでありました。

私は前には紀州の軍用金を無くして困つたことがあるが、今又初めて貰つた
給金の中五拾圓を取られ、其上に盗人に追銭で二十圓遣らなければならぬと云
ふことは、よく／＼金に就ては奇妙な運命を持つて居る者と思はれます。

函館の脱走に加はらざりし顛末

さうして上野の彰義隊の騒動の時にも小さくなつて潜伏して居りましたが、其
中に或は杖を銜いて歩き、或は杖なくして歩くやうになつて參りました、此時
に榎本武揚氏と芝の濱御殿、今の離宮に於て會合のことがありました、それに

就て今考へて見れば、自分の理想の卑しかつたことを悔ゆるのでありますが、それは古田新十郎と云ふ大膽不敵の男や、又會計のことに最も堪能なる立田彰信、此人は租税頭になつた人でありますが、それから桑原文藏と云ふやうな人も會計に堪能でありましたが、最も見識のある人は阿部潜と云ふ人でありまして、此人が私の處に來て榎本氏が濱の御殿に居つて貴公に面會したいとのことだから來て貰ひたいと云ふことでありましたが、私は其時初めて面會するのではありませんが、榎本氏は平生から崇拜すべき人物と思ふて尊敬して居りましたので、處で榎本氏の私への話は國館に脱走すると云ふことであつて、陸軍の中で於前の持つて居る兵が一番強いのであるから、それを一緒に連れて行かうと云ふやうなことでありましたが、其時に私は經驗もなく、世間もマダ暗く、實際辭令も知らなかつた故に、少しも上手な言葉も使はず、それはいけませんまい、日本は是から海軍國にならなければなりません、日本に於て本當の船乗はあな

たと、あなたの件をして居る人々ばかりである、それに脱走したならば、先づ十に八九は死んで仕舞ふと見なければならぬ、日本の國から船乗をなくするとは國家に取つて甚だ残念に思ふ、さうして北海道に行つて割據して居つても兵士が動もすると歸りたがるのは情であつて、妻子を東京に置いて、北海道に居ることは六ヶしい、さうして又官軍から彈藥の見舞を受けるやうな譯で成功はドウであらうか、それよりは今あなたが脱走を見合すれば朝廷では巡洋艦運送船と云ふやうなものを賜はるであらうし、運轉する金も、或は出来るだらうと思ふ、それを以てあなたは日本の海上の運搬に従事して、さうして部下を養つて段々歐羅巴等の交際の發達を計ることはドウであらうかと云ふことを申したのであります、其の時に榎本氏が一言の下にそれはいけないと言はれた、其時の自分の考は此事を除き良策でないと思ふたが、これは理想の卑かつたので、私は常々幕府の旗本などが自分の屋敷の玄関に色々なる道具を並べて、

古道具屋のやうなことをして居るのを見て、武士たるものが自分の道具を開けて支那で商賣をするとは實に腑甲斐ない話だと思つて居ましたが、併し私の榎本氏に勧めたことも矢張り軍艦に乗込むべき人に商船に乗つて海上運搬などをするに云ふことであるから、五十歩百歩であることを悟つたので、私の言ふ事を用ひなかつたのは榎本氏が豪いと思ひました、ツイこう云ふ次第で私は榎本氏と共に函館には行かなかつたのでありました。

駿河への脱走と水野泡三郎の假名

私の生命も中々安全でありませんでした、其中徳川氏は駿河に御出でなされることになつて、貴様も駿河に行つたら宜からうと言はれましたから、參ることになりました、其時に「都」と云ふ三百噸位の船で亞米利加人の所有して居るものがありました、其船に乗つて品川灣を出發しました、其時恰度榎本

氏が回陽丸を初めとして、其他の運送船を率ゐて脱走する時でありました、處が其時非常なる暴風に遇ひまして、軍艦や運送船などは木の葉を散らすやうに吹き飛ばさるゝと云ふ暴風で、三加保丸と云ふ運送船が銚子の濱に吹き付けられたと云ふやうな時でありましたから、吾々の乗つて居る三百噸ばかりの船も、非常な困難をして、伊豆の下田に辛うじて道入つたのでありました、此處にも官軍が出張つて居りましたけれども、自分等を捕へるのではないことが分りました、併し兎も角船に傷を持つて居るから、氣持が悪かつた、其處に泊つて次ぎに阿良連と云ふ港に行きました、是は最も小さい港であるが、良い港であります、其處に潜伏して居つて、愈風が静まつた時に、漁船に乗つて櫓を以て駿河の清水に着し、それから小夜の中山を越して駿河の藤枝の在に假住をすることになりました。

藤枝に居る時に東京の友人から通知がありまして、江原鑄三郎が小野三助と云

ふ姓名を以て藤枝に居る、速かに捕縛して出すと云ふことを藩廳から達せられ
たから、早く姓名を更へて移轉をしろと云ふ内通を受けましたので、急いで仕
度をして伊豆の韭山には友人もあることだから、其處に行うと思ふて沼津邊ま
で來ましたけれども、まだ姓名を思付いて居らなかつた。ドウ云ふ風に苗字を
付けやうかと思ふて居る中に、チヨット思付いた、おすこは水野の領分である
から、水野として置いた方が宜いと思ふて、先づ水野と假定し、而して名をド
ウ云ふ風に付けやうと思ふた時に、徳川家康公の詠んだ歌を思ひ起した、それ
は「吹けば行き吹かねば行かぬ浮雲の風に任かする身こそ安けれ」と云ふので
すが、此浮雲と云ふのを取つて水野浮雲としやうと思ふて見ましたが、私の知
つて居る人に水野痴雲と云ふ人がありますから、何んだか其人の眞似をするや
うでおかしいから、そこで躊躇して居る中に、鬼に角其歌の中でなくとも宜い
から他の名を考へなければならぬと思ふて、風と考へたのは私の生命が何時消

へるか分らぬ、恰度水の上の池のやうなものだから此の池と云ふ字を取つて、
水野池三郎と云ふ名にして置くと云ふ決心を持ちました、其中に知つて居る人
に遇ひまして伊豆には行かずに、駿河駿東郡中泉の字竹原と云ふ處の大沼嘉右
衛門と云ふ人の家に潜伏するやうになつて、暫く形勢を探つて居りましたが、
イツ迄も潜伏して居るよりは、自首した方が宜からうと勸めるものもありまし
たから、其筋に手を廻して見やうと思ふて居りました、其時代は自首したから
と云ふて罪一等を減すると云ふこともなく、出れば首を斬られるに極まつて居
ると云ふ時代であるから、其邊を考へて居る中に、段々朝廷の模様が變り私
はそんな危い人間でないことが分かつたから、首を斬られるやうな懸念がなく
なつたのであります。

静岡藩の少参事となる

さうして或る時藩廳から達しがあつて御用があるから出ると云ふので、静岡へ行きました、前に申した通り、千圓の月割即ち一ヶ月分から五拾圓と二十圓を引去つた、其残りの金はドンナことをしても使はずに置うと思ふて居りましたから、静岡に行く時も、宿屋に泊れば宿賃が要ると思つて、有度郡吉川村と云ふ處に、大きな藤棚があるから、そこに寝ころんで野宿をした、随分賤しい生活をしたこともあるけれども、野宿は初めでありました、寝て居ると始終往來の人が通るやら、又偶には官軍の荷物を大きな雲助が擔いで來ることもあり、ロクに眠られなかつたのであります、それから起きて静岡に行き、何用であるかと思ふて藩廳へ出ました處が、意外にも静岡藩の少參事を仰付けられると云ふ太政官の達でありました、生命が繋がつたばかりでなく、公然たる役人になつた、處が先きに御話し申した三加保丸の乗込員、銃子に吹付けられた脱走連中は静岡に引渡されて、静岡の牢屋に這入て居る、是等に謹慎を申付ける時に

は、大小を落せと言はれた時に、大小丈けは落したくないと言ふものがあつた、それは高野と云ふものでありましたが、大小を渡せと云ふて役人が來た時に、刀を持つて謹慎をしたいと申出でるや、否や、其役人が抜刀して高野を斬捨てたことがあります、さう云ふやうな殺伐なる時代であつて脱走人は至極慘酷に取扱つたのであります、私はそれ等を見るに見兼ねてドンナことをしても、使ふまいと思ふた金を全部見舞金として、遣つて仕舞つた、それ故歸りには宿屋にも泊ることも出來ず、飲食店にも寄りられず、然し芋をかぢりく、又大沼嘉右衛門の家に歸つて厄介になつたのであります、よくく金と云ふことに對しては、奇抜な運命に接すると云ふことを此時にも考へたのであります、それで役人になつてから沼津城内の友人の家に置いて貰つて、さうして暫く沼津方面の治政に従事して居つたのであります。

沼津兵學校の創立と我國小學校の元祖

元來 私は維新前いしんぜんの時は是非陸軍いせいろくぐんの發展はつてんを計はかりたいと思ひまして、それを計はかるには士官しきわんに學問がくもんがなければならぬと云ふことを感かんじました、其時代そのじだいには錢砲せんぱうを撃うつ訓練くわんれんをする、其鐵砲てつぱうを撃うつにも命中うちうちうするやうになる丈だけけのことであつて、學問がくもん上の事ことと論ろんするのは誤あやまりだ位くらいに思ふて居ゐつた時に、私は是非共學問いせいろくがくもんをし、相當さうたうの知識ちしきを具そなへなければならぬことを始終唱なげへたものであります、處ところが慶應けいおう元年げんねん頃ころには東京とうきやうに於おいて實行じつぎやうすることが出來こないから、僅わずかかに京阪地方けいはんちほうに滞在たざいして居ゐる士官しきわんを集あつめて、回讀輪講くわいどくりんかう等らうをせしめた處ところが、案外あんがい喜んで勉學べんがくしたのであります、それと同時に江戸えどの方ほうでは阿部潜あべひそむと云ふ人が私わたしと同じやうなことをやつて居ゐつたのであります、私は其人そのひとに一度會あふたこともあるから、手紙てがみをやつた處ところが、矢張り此人このひとも士官しきわんに學問がくもんをさせなければならぬと云ふ意見いけんであつて、

江戸えどで始めて居ゐると云ふことで、意氣相投いきあひどうしたのであります、此人このひとは世故よこごにも長ながじ膽力たんりきもあり、實じつに敬服けいふくして居ゐりましたから、私は其人そのひとの總まての命令めいれいに服従ふくじゆうしやうと思ふた位くらいであります、然しかるに其人そのひとは相應さうおうの計略けいりやくを以もつて、一いっ緒しよに沼津ぬまづに參まゐつたのであります、私は少參事せうさんじで静岡縣しづまけんの軍事掛ぐんじがりを命めいせられました、阿部氏あべしは何なににも命めいせられないが、實際じつざいは私の仕事しごとの實權じつけんを握にぎる位くらいの人ひとであつた、私わたしは江戸えどを出立しゅつたつする時ときに阿部氏あべしと約束やくそくして駿河すまがに行いつたならば、學校がくかうを建てて生徒せいせいを養成やうせいすることにしたい、ドツしても、是こゝから先さきは知識ちしきの進歩しんぽと云ふことは何なにより文明ぶんめいの基礎きそであるから、學校がくかうを建てたらドツであるかと云ふ處ところが、同氏どうしの言いふに自分じぶんも其事そのことを思ふて居ゐると云ふことであります、既に東京とうきやうを出立しゅつたつする時ときに、私わたしも考かんがへて居ゐりましたから、爰こゝで豫約よやくが出來こえて居ゐつたのであります、私わたしは急に成上なりあつたもので、交際かうさいも何も世間せけんにありませんでした、阿部氏あべしは名望めいぼうもあり、交際かうさいもあつたのでありますから、種々しゆしゆな

る方面の學者を招聘して沼津で初めて、歐羅巴流の兵學校を建てたのであります。是が日本に於て組織的學校の元祖であります、其時の校長は西周と云ふ人で、此人は後に陸軍に召されて榮職にありましたが、先頃死なれました。男爵の御沙汰があつたのですが、それから今の赤松中將とか田邊太一とか、大槻少將、黒田中將、或は岡本監輔、中根一郎、乙骨太郎乙と云ふやうな倔強な學者を招聘して英學、佛學、算術は微分積分迄、それから體操、それから圖書、劍術、乘馬、練兵、水泳と云ふやうなあらゆる學科を具へたる學校を建て、さうして尙ほ附屬の小學校と云ふものを設けたのであります、是も何にしる從來ならば四書五經を讀ませる時代で、寺小屋では名頭、國盡しを讀ませると云ふ時代に體操をやらせ、算術をやらせ、繪も書かせる、本も讀ませると云ふやうな新しい小學校を建てたのです、さうして尙ほ衛生の方面に於ては病院を建築してそれにも立派な大家が従事して居つたので、非常な成功でありました、其病

院は今でも立派に繼續して居るのみならず、年々歳々盛大になるばかりであります、其兵學校の生徒からは澤山な人物が出て居ります、或は陸海軍の士官、或は實業家もあり、或は政治家もあり、教育家もあり、種々なる方面に居つて、随分國家に貢献したのであります、軍人では今は追々老朽して豫備後備に這入つた人も澤山ありますが、日清事件の時に志摩の艦長尾本、副艦長壹岐と云ふやうな人々も、沼津出身の人で、田庄臺の戦の時に、砲兵の指揮總監が黒田中將で、工兵の指揮總監が矢吹中將と云ふ風であり、又遼東半島の兵站監が古川宣舉と云ふやうな譯で、澤山な働きをしました、モ一今回の日露の戦争では多く留守師團長、或は兵站部に居ると云ふやうなもので、前に戦時に出た人で又今度出た人は古川中將等の數人になつて仕舞つたのであります。

沼津兵學校の閉鎖

其學校の設立された時に山縣さんと記憶して居りますが、沼津の兵學校を觀に來られたのでありました、其後此學校は陸軍の管轄になつて全く陸軍に屬し、して、さうして其後東京に移轉を命ぜられると云ふことで、教員と生徒も屬更も門番に至る迄悉く皆な東京に移轉して、其學校は開校になりましたが、随分其學校に附屬の書籍なども澤山あつて、小さな倉に一つ二つには入れきれない程でありました、或はランセルとか、山砲とか、小銃のやうなものも澤山ありましたが、皆なそれは陸軍に引継ぎました、尙ほ珍らしいものが澤山あつた、其中に測量の大家伊能先生が自身で引かれた日本全國の繪圖が數十枚ありまして、大抵二疊敷位のものも澤山ありましたが、皆一々針を打つて経緯度を正しうした繪圖が揃ふて居つた、只五畿内が無かつたのであつて、是は其時代の事を推測して見ると或は錦旗に憚つて伊能も測量しなかつたと思はれます、處が偶然に他日揃つたと云ふことを聞いたのであります、それは幕臣で佐

々倉と云ふ人が何か用があつて京阪神戸あたりに行つた時に買物をして包み紙に困り、大きな紙を求めやうと思ふてフト古道具屋を見ると、廣い紙があつたから是を買ふて包紙にしやうとしたら、何を計らん是は矢張り伊能君の引かれた五畿内の繪圖であつたので、是は不思議なものがあると思ふてそれには物を包まず歸つたと云ふことでありました、これは勝安房さんが兵庫に海軍の根據地を置いて防禦をしようと云ふ考で、此ことには朝廷も御苦心になつたので、それ等の参考の爲めに是丈けのものを持つて居つたのであらう、それを御維新の時に官軍で引取けて居つても別に氣も附かず、反古と思ふて古道具屋へ賣つて仕舞ふたのであつて、それは偶然に佐々倉氏の手に入つた爲めに大方獻納したらうと思はれる、是は餘程面白いことであります。

暗殺を免れたる話

今申した學校は今で申すと頗るハイカラで所謂進歩的と云ふべきものでありまして、生徒を入れる時には體格の検査をしたのであります、それは非常な入釜しい問題でありました、今は何とも思はないけれども、日本で曾つて無いこと
で人を裸にしてドコからドコまで検査すると云ふのですから、此上もない侮辱
であると思ふて非常な物議があつた、けれどもさう云ふこと迄も實行した位
であるから如何に進歩的であつたかと云ふことが分かるのであります、それか
ら朝廷からは三千人の兵を養成しろと云はれたのである、處が阿部并に私な
どの意見ではドウしても藩と云ふやうなものは今後永く存置するやうでは日本
の前途はいけない、是非其廢藩置縣、郡縣にならなければならぬのである、又
必ずさうなるだらう、然らば暫時の間の命脈に對して兵などを養成した處が其
兵の出來上る時分には其兵を廢して仕舞はなければならぬのである、と云ふ考
でありました、其時代には不生産と云ふやうな言葉が無かつたのですが、兎に

角益もなく多くの金を費すから、それよりは只中等以上の知識を興へる方が宜
いと云ふ考で主もに其方へ力を盡して居りました、處が兵を組織することに
なれば其士官となつて給金も取れるし相當の地位を得られると云ふ處から、バ
ンに飢えて居る人々は兵隊熱を振廻して屢々藩廳に迫つたのである、其時に藩
廳ではイツでも其事は阿部と江原に任したから彼れに相談しろと云ふのであつ
た、コチラではそれ等を聞入れないから色々な事を云出して、君公が御小さい
のであるから阿部と江原が専斷を以てするのである、若し朝廷から出兵の命が
あつた時には即ち君公の御失態になつては甚だ恐入る次第であるから、阿部と
江原のやうなものは斬つて仕舞はなければならぬと云ふて屢々暗殺の企をし
たと云ふことである、阿部と云ふ人は能く注意をする人で、其企を聞くや否
や其團體に飛込んで言ふには、己等を殺すさうだが殺すなら殺しても宜しいが、
其前に話して置きたいことがある、今後の時世に對して斯う云ふことが必要で

あるから、己等が斯う云ふ考でやつて居ると云ふことを能く話して彼等を納得せしめたのでありましたが、教育を初めに普及する爲めに暗殺をせらるゝと云ふやうなことは四十年前にはあつたのであります、明治二年一月元日に後藤と云ふ兵學校の屬吏の家に朝早く御頼み申すと云ふて來たから、何の氣なしに取次ぐと、御歳玉に是を上げますと云ふて風呂敷包を出した、少し重いと思ふたが別段何とも思はず、奥に行つて開いて見ると大柳内龍太郎と云ふ人の生首が盆に載つて居つたと云ふことでありました、是は阿部江原を暗殺すると云ふことを此人が後藤を通じて阿部に通じたことと云ふことから、其團體のものが首を斬つたと見えるのです、さう云ふやうな反對を受けつゝも到頭兵學校と小學校の成效をしたのであります。

我國最古の銀行と牧畜業

今一つ興味ある問題は藩廳では三千人に對する定額金を設けたのである、處が僅かな小學生徒と一つの兵學校丈けであるから金がさう澤山要らぬのである、そこで餘つた金で何かしやうと云ふて阿部、龍田と云ふ人と私なども賛成して銀行のやうなものを立てた、さうして沼津に本店を置いて、清水、横濱、東京等に支店を設け、蒸汽船の一艘も所有してさうして奥州の米を東京に運び、或は東京のものを彼地に運び、或は爲替を取組み、又は荷物を抵當で金を貸すと云ふやうなことを始めて、段々金が殖へれば後ち廢藩置縣となつても小學校兵學校を永遠に維持することが出来ると云ふ理想であつた、處が朝廷から卒然と命令が下つて士旅が商業をすることは體面に關するから、此狀受け次第速かに閉店しろと云ふことであつたから、狼狽して止めたことがありましたが、是等も今考へて見ると面白い問題であります。

今一つの面白い問題は一方では教育をしたり商業をして、同時に不毛の地を開き

農業上の發展を計るのが必要と思ふて、愛鷹山へ牧業を創めた、當時伊豆の國の駿牛の極く上等なものが一頭七圓で買へる時代であるから、それに外國の牛をかけて雜種を取るならば一頭百圓には賣れるやうになる、何となれば日本は是から肉食をするやうになる、同時に牛乳を用ゐるやうになるに極まつて居ると思ふて居つた、處が横濱に居るスミスと云ふ人から極く良いシヨルトホーンの牡牛を一匹呉れると云ふことでありました、それを貰つて津田仙さんが非常な注意をされて箱根山を越して持つて來て呉れましたから、感謝の意を表して我々の方からもスミスと云ふ人に同じ毛色の馬二頭、馬車馬に御使ひくださいと云つて贈つたことであつた、是は洋牛の牧牛では嚙矢であると思ふ、處が又朝廷から嚴令があつて、牧牛をすることは外夷の肉食の習風を鼓吹するやうなもので國體に對して恐入る次第なれば速かに廢牧しろと云ふ達しでありましたから、是も直ぐに廢牧しました、なせなれば東海道は馬が出来から馬の取

扱が出来るが、牛を取扱つたことがない爲めに農家では容易に預つて呉れないからであります、それからスミスと云ふ人から貰つたシヨルトホーンと云ふのは赤い大きな牛でありますから、尙更預り手がないのでありました、止を得ず伊豆の國の岩科と云ふ處に牧場があるので其處に頼んで置いて貰つたのであります、處が自然交尾で駿牛から、餘程良い牛が出たので大層喜んで雜種牛の利益を知り、其れ以來一つの牛の改良に偶然良き結果を與へたのであります。

學校に刀懸がある間は駄目だ

今一つの面白い問題は、私などの理想として居つたのは學校に刀懸けがある間は到底いかぬ、學校などには刀懸は無くするやうにしなければならぬ、即ち廢刀と云ふことを理想として居りました、又下駄段もなくなるやうにしなければならぬと云ふ考を持つて居りました、そこで阿部、龍野と云ふやうな人は士族

の子弟の器用な者を選んで、學資を與へて横濱に靴製造の修業に出したのでありませうが、それから非常なる入釜しい問題が起つたのであります。今ならば平等であるから何とも思はないですが、元とは穢多非人と云ふものは賤いもので靴や雪踏の製造は此穢多などがやつたもので、皮は皮坊が取扱ふものなるに、士族の子弟に皮坊の事をさせるのは怪しからぬと云ふて騒いだことがあつたが、それにも構はず横濱へ修業に遣つて遂に成效して歸つたのであります。其中に陸軍で靴の製造が始まる時に陸軍の靴の製造の長になつて幾分の効驗がありました、是は御維新の時の面白い履歴であらうと思ふのであります、此時の景況から見ると、日本今日の有様は長足の進歩と云ふべきであります。

子の受けたる境遇と感化

文學博士 南 條 文 雄

母より聽きし鳳潭の話

私の幼年の時母から聽きました話に、昔し鳳潭といふ人がありまして、少年の時に出家しまして叡山で勉強したんです、其頃叡山に學者があつて、その方が講釋を始めた、初めの時は大講堂に一杯傍聽者がありました、それが追々少しになつて終には鳳潭一人になつたんです、それでも鳳潭は毎日通學を致しました、所で或る日其講釋をする人が、餘り一人では便がないから講釋を暫く休もうと謂ひました、其の時に鳳潭は明日連を拵へて参りますから是非お續け下さいと願ふて其日は飯へりました、それは鳳潭が其頃京都の大佛の邊に住つて

居つたといふ話で、大佛の所から叡山の山頂迄は三四里の里数です、それで飯へりまして伏見街道に参つて、伏见人形の西行や布袋といふやうなものを澤山買ひ求めまして、それを以て翌日叡山に参りました、さうして講堂に列べ、講釋の始まる時間を待つて居つた、講釋をする人はそんな事は氣付させぬから、今日は鳳潭の外にも傍聴者があると信じて出て参りました、所で矢張鳳潭一人であつたから大にそれを咎めたんです、さうすると鳳潭は平氣で、講釋の始めには講堂に人が満ちましたが、今になつて其多數の人々はどういふものであつたかと考へて見まするに講釋を聴きに來は致しましたもの、其講釋が耳の孔に通つて居なかつたやうに思はれます、それで先生は傍聴者が一人では講釋が出来ぬといふお話でありましたからそれで唯頭数を揃へたのでありまして、最初から私は傍聴者が無くても何處迄も自分一人で講釋を聴くといふ、斯ういふ決心で毎日續けましたといふ、其一言に感じて、それでは外のものは居なくて

宜いからといつて、鳳潭一人の爲めに長く講釋を續けられたといふお話です。是は私の父が能く人に話した話です、それは私の幼年の時に父の話では能く興味を感じさせぬが、それを母親が受け継ぎまして、お父さんの話されたことであるがといつて、昔話に交せて能く話をして呉れた、それですから私が只今のやうに小學校の無い昔の寺小屋に通學を始めました頃にも、雨が降るとか、風が吹くとか謂つて休みたくなると、毎時も母親が此話を持出て鳳潭の話をお忘れかかと申しました、それが爲めに休むことが出来なくなつて、出掛けるやうになりました、これが私が子供の時に勉強致さなければ世の中に立つことが出来ぬといふことを感じました第一原因で、今に至るまで忘れさせぬ唯一つの感話であります。

先年英國杯にて世話になりました先生に別れまする前に、此話を書き取りましてそれを見せたことがありました、これが此第一番の話です、それから細かい

ことも種々ありますけれどもそれは省きます。以上は十歳以前七八歳頃に聴きました話であります。

第二に受けたる得一師の感化

それで十歳に達する間にはそんなやうの調子で行きまして、十六七八歳の時、即ち御維新少し前の頃、私は美濃大垣の生れであります。大垣から三里程離れた所に一人の徳者がありました、モ一今日では故人で、其頃其人の名前は得一と申して、是は老子の中の句より出たものであります。私共の宗旨の學者で、法談、法話が上手な人ですから、始終彼方此方に話し歩かれた、父は其方に私を従はせた、それ故に私は其徳者に隨行致して前坐を致しまして簡單に話をする、後に其先生が話を、是が誠に徳者でありまして實に此道徳堅固の人であつた、私の今日迄此の兎も角も眞似丈でも尊崇致して休めずに居ります

のは、畢竟此人の感化にあるのであります、父兄丈では押れて教へを守られぬから、父が其方に頼んで私をつけて呉れた、それが爲めに此得一といふ人は非常に私を世話をして呉れました、それで眞宗では肉食妻帯と申しまして、普通に肉食を仕まする家内を持ちまする公然許す法律があるに拘はらず、兎も角も徳人であつて、而かも婦人に付ては友人に何にも噂といふものを立てられなかつた、その一つで品行の正しいものであるといふことが知れます、非常に道徳者であります、此人は又非常な潔癖家で、奇麗好きであつた、吾々が十七八歳の頃極瘦腕で水を汲むことを致しましたが、随分苦しかつた、今以て忘れませぬ、一日の中に水を使ふといふことは非常なんです、便所杯より出て來られます、手足に澤山の水を懸けてさうして洗はせるやうのことです、若い時は廣瀬淡窓の塾に入りて一通の漢學を學び時澤山に出來て却々面白い詩が出来て居ります、畢竟徳者といふ所から親が私を付けましたのであります、

此方は十餘年前七十五歳で歿しました。

此人の話は極簡單であります、全く必要の事丈を話します、一話致しても、二席話しても、直ぐに済んで了う、モ一少し話を願ひたい杯と發起者から頼まれましても、餘計のことをいふ必要はない、全體宗教の話杯といふものは人を安心させるのであつて、餘計のことをいふと、却て人の心を亂して詰まらないといふことで、如何にも要を得たことを話された、其話中には時々滑稽といふ程のことでもありませぬが、却々興味あることを話されました、是が私の一の教訓に残つて居ります、先生の話は何處から出て居りますかといふて後に聴きましたら、無住の沙石集にあるやうに謂はれました、今本にして二冊になつて居ります、合本で一部になつて居るのもあります、沙石集の第四の上の「無言上人のこと」是が其先生の話を飾り無く話すと大變に面白い、此一冊は十六枚あります、跡の十五枚といふものは興味のある説明である、次ぎは本文

であります。

無言上人の事

或る山寺に四人の上人有り、真如の離言を觀じ、淨名の杜口を學ばんとや思ひけん、契を結びて道場、莊嚴し萬縁をやめ、三業をしづめて道場に入り、四人座を並べて七日の無言を始む承仕一人を出入しける、茲に更たけ、夜ふけて燈のきえんとするを見て、下座の僧承仕火かきわけよといふ、並の座の僧無言道場に物申す様候はずといふ、第二座の僧二人共に物の云事餘りに心地悪く覺て物にくるはしたまふなといふ、上座の老僧様はかはれども面々に物いふことあさましく、もどかしく覺え、法師ばかりぞ物は申さぬといふてうちうなづきける、かしてげにて殊に嗚呼がましくこそ覺えけれ。

是は詰り或る山寺に四人の出家が居りまして、そこに毎日寄るとさはると問答などを遣つた、所が或日のこと不圖感じた者と見えて、お互に斯様に入ヶ間敷

話を遣つて居ても、此佛教の眞理を本統に味ふには唯口許りで遣つて居るのではいかぬ、本統の眞理といふものは深く考へなければならぬ、それであるから今よりさうしやうといつて互に約束をした、三業といふて身體にて行ひ、口で物をいふこと、心に思ふといふ其三つの業を約束して、何事も言はない、一事も思はない、働かないといふことで、道場に行つて四人が座を並べて、今日から一週間物をいふまい、さうして一つのことを考へて見やうと、それを佛前でやつた。佛の前にて香を焚いたり、蠟燭を立て替へたりする萬事の用向きをす一人を置いた、所が始めの日の朝から始まつて、其晩の夜も段々とふけて來た、所が佛の前なる火が消えかゝつた、兎も角も火が消えかゝつたから其處で四人の中の一番末座の僧が(承任は小使のこと)小僧火が消えかゝつた掻き揚げよ、と斯ういふことを言つた、自分は坐禪でもやつて居つた、立つて往つて火を揚げる事が出來ぬから小僧を呼んだのである、そこで無言の行を破つて了

つた、さうすると並び坐つて居つた僧がいふには、今無言道場で言葉を出したではないか、お静になさいといふて其人を咎めた、それで自分も破つた、是で二人ともに破つた、そこで末座から三人目の人が八ヶ間敷でならぬといふたので三人ともに破つた、さうすると今一人の同士、一番上座に居つた老人が今の三人の若いものが言つたのを黙つて聽いて居りましたが、自分の注意であるか、法師許りは物は言はぬとうち背いた、私許りは物を言はぬと四人は一續きに無言の行を破つたといふことです、矢張山寺の中に閉ぢ籠つて、佛道の修業を専門と致して居るものが申合せた一週間無言でやらうといふて取り掛つても、實行し難いものである、自分が思立つて貫くといふことは困難なるものである、さういふ話を廿年以前に子供わがりに聽かまして非常に感じました、是は學校でも何處でも應用の出來る話であります、非常に感服致しましたものであります、面白い所に眼を着けられた、餘り多くのことを謂はぬで極簡單に話をす

る、能く人に話をして記憶出来るやうに話された、是は學校杯の生徒に對して能く私がいふことであります、四人の生徒が或る所に一人の教員の前に勉強することを遣つて居つたとすると、矢張此話をする事が出来るであります、畢竟直に勉強をせぬ人が人の顔に墨の付いて居るのを見て、それをいふやうなもので、矢張他見をするから人の顔に墨の付いてゐる事が解かるので、直といふことが謂へぬのである、斯ういふ話は鑑として自分の心の歪を直すべきことで、斯様の話は大變に益になることであります、是が私が二十以前に感ぜました第二であります。

兵法の書物に依て得たる宗教上の覺悟

モウ一つの其丁度第三に謂ひまするのは、私の十八歳の年から十九歳の年迄、歩兵隊で大垣藩にて兵隊を遣つて居りました、其時には雨が降つて戶外に出られ

ませぬといふことであります、寄集つて戦争に關係するものを讀んで見たり或は自分一人丈で讀ました、其中に昔の兵法の書物の孫子を讀んで見ると、孫子は十二篇あるが、丁度其中程に、それが非常に面白い、「故に兵を用ふるの法は其來らざるを待むことなけれ、我に以て之を待つこと有るを待む、其攻めざるを、待むことなけれ、我に攻むべからざる所あるを待む、丁度彼の月明星稀鳥鵲南飛といつたのは是は魏の武帝即ち曹操の詩の句であつて、そこで孫子には魏武註が有りました、本文の方に詳しくありますから、註には極略してあります、『安不忘危、常設備也』とあつて、危急存亡の場合に臨では周章ては取返へすことが出来ぬ、安心の場合に於て危急存亡の時の備をなし置けといふことで、斯ういふことを孫子といふ人がいつたのであります、誠に註が面白いのである、之を讀んで見るといふと、非常に面白い、孫子は兵を用ふるの法といふことを謂つて居りますが、此兵の字を心の字と變へたならば矢張私

其の専門の宗教の言葉の心を用うるの法にて其の敵を指す、敵には眼に見える敵もあるし、眼に見えぬ所の敵もある、何れにしても自分に反対するものは敵です、其の有形無形に拘はらず、其と目指す所の敵が遣つて来ないといふのを頼み力にして居りますのは大變に油断するのである、何を頼りとするかといふと、我が自分一身に申せば以て之を待つ、之れを以て自分の兵にて確かに待てるといふ覺えのあることを頼め、サー敵は毎時何時でも来い、来れと敵を待ち受けて居る、其用意の出来て居ることを頼め、モー一篇其言葉を繰返へして言へば、其指す所の敵が攻撃を始ないといふことを、頼み力としてはならぬ、何を頼みとするかといふと、我が味方に於てはどう敵が考へましても、攻め込むことが出来ぬといふ、攻むべからざる所あるといふところを頼みにせよといふことで、平常に備へが出来たなれば事の起つた時分の周章ないでスツと直ぐに出掛けることが出来る、そこであるから、心を確かにして其間に何時なりと

も此死ぬといふ時が来ましても、死を見ること歸へるが如きといふ考へを以て平常から決心をして居る、總て宗教ではさういふことを謂ひますけれども、私共の宗旨では、斯うして居る間にも何時に命がなくなつても我が精神の飯着たる所は決して置かなければならぬ、私は兵隊になつて居る時分に鐵砲を擔いで居つて、雨が降ると孫子のやうな書物を読みましたけれども、それで非常に感じました、兵法の書物を読んだ許りでなく、それは直ぐに前に附いて居つた得一といふ人の薰陶に依て味ふことが出来たのであります、それでありますから、此言葉杯も近頃に至つて名古屋の軍人杯に話をしたことがあります、毎時も軍人に向つて能く例として出す話であります、是が第三の自分が記憶に残つた話であります。

二十歳の時に僧兵隊を解かれて了ひました、それを機會として、私は京都に出て學校に入りました、それは御維新の當時で此東本願寺に今日でも残つて居

ります彼の高倉の學寮と申しますので、今は眞宗大學寮と申します、それは、すつと前から出來て居ます、今以て形は残つて居ります、明治元年四月から明治二年七月迄居つて、其時分に種々の人の講釋を聽きました、専門の書物の講釋を聽きました、誰と定まりませんで種々の話をしたものであります、其時に學頭の一人に會津生れで京都に住つて居つた人で、明治十八年の頃八十六歳で歿されました、香山院といふ人がありました、此人は種々の講釋をした、學徳の非常に高い人で、大きに心から服して居つた、此人の話を聽くのが一番興味を感じたのであります、何分此御維新の際に於ては、佛教杯は全く無くならうといふ評判があつた時ですから、香山院といふ人も心配をして、此學校の外に佛教外の事までも研究する爲に學校を別に開きました、其處には、基督教の「バイブル」杯を漢文に翻譯したものを吾々に講釋された、其時分に書き取つたものは今もある筈であります。

佛祖統記より見出だしたる爲法不爲身の五字

明治二年の七月までは京都に居りましたが、其後半年と明治三年又は全一年は大垣に居つた今日でも大垣に住つて居る友人でありまして、其人から書物を借りました、是は佛祖統記と云ふ支那で出來ました佛教の歴史であります、之を段々と讀んで行きました、明治二年の七月から三年と一年半の間に讀んだ、統紀六十四冊是はモ一非常に感じた、今に至る迄口癖に申して居ります、「爲法不爲身」此(室の扁額を指し)額の文字もさうです、是は張常惺といふ人の書で、先年西京迄來ました時に書いて呉れました、非常に篆書に有名の人であります、此人には以前支那でも面會致したことがあります、それで其西京に參りました時に、私から文字を指定して「爲法不爲身」と書いて貰ひました、此佛祖統記の四十六卷の十八枚で、日本の紀元一千〇六十四年頼義が陸奥を平げた

る頃即ち前九年の役の頃のことがあります。其文は左の如くである。

嘉祐七年藤州沙門契嵩初得法於洞山聰禪師、至錢唐靈隱、閉戶著書、既成入京師、見內翰王素、進輔教編、定粗圖、正宗記、上預其書、至爲法不爲身、嘉歎其誠、勅以其書入大藏、賜明教大師、及途中書宰相韓琦、以視參政歐陽修、修覽文、歎曰、不意、僧中有此耶、黎明同琦往淨因、見之、語終日、自宰相以下、莫不爭延致、名振海內、及東下吳門、大覺禪師、昨自雲舘以途之、(石門文字禪)

是れ宋朝の亡ぶる前、志磐の撰する所でありませす、即ち洞山聰禪師の弟子になつて、錢唐の靈隱寺にて戸を閉ぢて了つて書物を拵へた、其書物が出来たから京都に行つて、内閣書記官長に見えた、内閣書記官長より宋の仁宗皇帝に之を奉つた結果、大師の號を天子より賜ふた、さうして宰相は韓琦、歐陽修は參政、即ち樞密院議員であつた、此文章を見て非常に立派のものと感じた、そこで、内閣大臣の一人の韓琦と同じく歐陽永叔も淨因寺に尋ねに行つて文章のことを終日物語りして、非常の評判であつた、宰相以下争ふて我れ遅しと招待した、それで四海の中に名聲が廣まつた、吳門とつふ方に向つて行く時、大覺の禪師

は白雲謠と云ふ詩を作りて之を送りたのであります、其中に斯ういふ話があるのであります、此文章には仁宗許りが感じたのでなくして、三人のものをも感せしめた、それは即ち此「爲法不爲身」の五字であります、他の人迄終に其作者に迄會ひに行つたといふは、どういふ所に感じたかといふと、それを段々と味つて見ると、此の法といふ字を公といふ字に變へて身といふ字を私といふ字に變へさへすれば公の爲めにして私の爲めにせず、公のことといふことさへ考へますれば自分一身は立つて行くといふことである、法といふものは自分の平常信仰して居る所の方では佛であるが、是が宗教に冷淡なる人に取つては一向に不用の言葉のやうに考へるお方があるかも知れませぬ、是は非常に意味の深い言葉であることを覺えまして、私は明治二三年の頃から今日迄三十七八年味つて居る文字であります。

私は明治九年以來十七年迄英國に居りましたが、能く此五文字を持ち出して

話したことがありません、私は明治九年に英國に行きました、初めは英國の言葉は知りませぬ、英語の解る人に大越成徳といふ人がありまして色々厄介になりました、此人は始め倫敦の公使館の書記生になつて行かれたのであつて、中頃一度歸朝された、扱其送別會を倫敦に開いた、英國には其時に末松謙澄君杯も居られた、各席上にて送別の話を致された、其時に私は今日大越君の歸朝に就いて何も送るものはない、明治二三年の頃から自身にて味つて居る「爲法不爲身」といふ此五つの文字を以て送りたいのである、法の爲めとは自分達のお引受けなさる仕事に何でも自分の守るべき所のないものは詰まらぬと思ひます、今日官に在る所の方は自分の努むべき所を勉むるので、即ち法といふ言葉は味ふて、それを公といふ言葉に變へてしまふと、自分一身は立つて行くと思ひます、「爲法不爲身」を公の爲めにして、私の爲めにせず、と變へて味つて貰いたいといふことを言つて別れました、さういふ工合に彼方此方にて此話

を致しました、爲めに明治二三年の頃に初めて貸して呉れた所の友人の書物に依つて得た所の五字を守り、且つ之を廣めた、終に其人は此本を私に贈つて呉れた、それに對して、永く紀念になるものを書いて呉れといふことでありまして、私は五言の古詩の中へ「爲法不爲身」といふ字を入れて書いて贈つた、此書物に取つては、さういふ工合に縁故があるのであります、此句は味つて見ますと非常に面白いのであります。

英語も知らずに英國へ留學

其後明治三年に縁があつて越前に参りました、越前の方では私の親として居た人には御維新の前に美濃にて會ひました、當時は他人であつたが他人が親子になる縁があつたと見えました、其人は宗學専門の方の學者でありました、本願寺の學頭になつて明治二十二年に亡くなられた、私は明治四年に越前に参つて

直様西京に出まして其夏は京都に居つた、明治五年に東本願寺の役僧になつた、明治九年に英國に留學することゝなつた、一向に英語も何も知らぬで行つたものですから始めのうちは手が付かんで困りました、倫敦に三年餘り居りまして少々英語が解るやうになりました、それから倫敦を去つて、オクスフォードに行きました、則ち明治九年の八月にロンドンに着して十年一年と居りまして、明治十二年の二月上旬に、七日頃と覺えて居ります、兎も角も十二年の二月上旬に始めて倫敦から獨りで行つてマクスミユラー先生に會いました、其ときの感じは今以て忘れませぬ。

倫敦より牛津に移る

プロフェッサーのマクスミユラー氏は獨逸の生れで後に英人になつた人である、明治三十三年十月二十三日に七十三歳にて亡くなられた、此人の集められたも

のは只今東京大學に来て居ります、男爵岩崎久彌氏がそつくり買ひ求めて將來マクスミユラー文庫といふものを拵つて其處に集めるといふことになつて居ります、私の英國に於ける同學の友達といふのは肺病で亡くなりました、此人は笠原研壽と申して同じ學を研究して居りました、佛教の書物の日本に傳つて居るものは、皆翻譯書で傳つて居る、それで原書で調べたいといふのは自分達の考へ許りでないのである、私が行つて居る間に丁度其時に日本の公使にて上野といふ人がありました、其人にも話しました、吾々英語を覺えてそれでサンスクリット即ち印度の古語で以て、吾々の専門のこの書いてある、佛教のことを調べたいといふことをいつた、印度の國は英國の保護を受けて居る國であるから、印度のことを調べるには却て英國にて調べる方が近道であらうと思ふて來たのでありますから、どうか然るべき大家に紹介を願いたといふことを頼んだ、さうすると公使は英語が解らぬと可かないから英語が解らぬでは大家に會

ふた所で仕方がなからうが、併し注意しやうといふことで公使が親切に注意されました、明治十二年の一月公使から話があるから来いといふことであつた、私は公使館に行つた、公使がいふには此間夜會があつて、一人の基督教の教師が居りまして段々君等のことを話し佛教の原書を読みたひのであるがどうか、然るべき大家は無かるうか、誰が宜からうといふと、其人がいふにはそれはオックスフォード大學のマクスミユラー先生が殊に宜いとの事、併し私は紹介をする近づきがないから私が一つ外へ話をして見様、其人が紹介状を書いて呉れば必ず其先生は引受て世話をして呉れるに違いない、私が話をする所のお方が承知をして紹介書を書いて呉れないやうであればどうも致方がない、兎も角も一つ近日の中に話をして見やうと謂はれた、所がそれから二三日の中に手紙が来た、それは誰であるかといふと、英國々王の御墓のあるウエストミンスター則ち英國議事堂の側にある有名な寺院の教長スタンレーといふ人であつた、此人はマクスミユラー先生の親友であつた、此人が心持宜く紹介書を書いて呉れた、此紹介書を貰つて先生の所に尋ねて参りました。

初めてマクスミユラー先生に面會す

それから、一向無遠慮に出掛けて名刺を添へて出て行きました、行きました時はマクスミユラー氏の夫人今日では未亡人でありますが、其夫人が直ぐに出て来られました、先生の書齋に通されました、此人の紹介書を見られてから、大概解つた倫敦に於ては無論勉強は出来ぬ、併し、始めから私が世話をするといふことは出来ぬが、兎も角も倫敦の方を引上げて田舎の方に引込んで来るやうにといふことであつた、書齋の中を見ますと、先生の高いテーブルの中には書物が山程ある、之をお前知つて居るかと言はれた、是は日本で出版になつた「梵語雑名」であつて、梵字が書いてあつて、又支那の文字も書いてある、日本

の片假名も付けてある、何年何月の出版といふことである、私は始めて來まして、遙々來た所が斯ういふ自分の國で出版が出て居ることを知らぬといふことは可笑しいことであつた、併し此本は同氏の友人から送られたものだといふことです、日本にも梵語の儘の佛教といふものがあるかといふことであるから、私は幸にして自分の生れた寺の書物の倉の中に吾々の讀む阿彌陀經といふものが出版になつたことを知つて居ります、外のものは有るかないか存じませぬが、阿彌陀經といふものは私共の常に讀んで居る梵本又は出版して居つたから、そのことを申しますと、それを持つて居るかと言はれますから、それは持つて居りませぬ、それは私の生れ育つた寺にありません、それは甚だ遺憾のことであるから早速取寄せて見よといふことで、先生の方では私共を世話をしたならば是迄印度の方より日本に行つた所の材料は、日本の方から得らるゝといふお考へであつたから、早速手紙を出して取寄せました、所で私は倫敦から始め

て來てさういふ大家に會ふたのですからどうも思ふやうには謂はれない、二年餘り倫敦の方に居り則ち二十八歳の時に行つて二十九歳、三十歳、三十一歳となつたのに言語がまだどうも思ふやうに話せない、それは後年笠原氏が亡くなつた時にもマクスミユラー氏はタイムスの紙上に於て彼等の來た時は未だ自分の目的を充分に話すことが困難で、何のことも出來まいと思つたけれども、少し宛解るやうになつたといふことが書いてありました。

マクスミユラー先生の教育

其二月中に引越して参りまして一週間に三度程教へを受けるといふことであつた、さうして折々先生は我々に何を讀んで居る、何處迄讀んだ、話に來い杯といふことで指導を受けました、先生は奥様と娘さん二人と子息が居ります、皆非常に可愛がつて呉れました、同學の笠原は其年の十月に遣つて來ました、二

人とも同居して隔日に必ず参りました、先生は午後の五時前後には家内一同集りまして、茶を飲みます、茶を飲んで一時間又は私共の爲めに時を與へられた、私共一年半餘費して取り掛つたことを一時間経つか経たないことに叩きつけられて了つた、全體天性と見えて眞に我子を勵ますやうにして、三十歳前後であつた吾々二人を子供の如にして烈しく遣つて置いては折々後から手紙を寄越されて、大變私は肝癢持ちで怒るやうであるが、お前達二人の爲めを思ふていふのであるから悪しからず思ふて呉れるといふことであつた、それに甚だ感服した、その御蔭で本も少し許りは讀め梵語の味を了解する事が出来る様になりました、さういふ譯であるから明日は差支があると、明日は約束日であるが自分は倫敦に行くのであるから休みであるといふことを書いて、仕事やら申譯やらの手紙を送られる、そう云ふ手紙が八九十通今日も尙残て居ります、今其一二を掲ぐれば

われは或る所より多き日本の梵語の書物を受取つた、若し汝が明日土曜日五時十五分に來るならば我は汝に澤山の書物を見せることを好むであらう。

マクスミユラー

明治十三年三月五日

南條文雄殿

五時十五分の十五分なる時間を正確に指せる所感服に外ありませぬ、又十三年の七月十五日の端書に斯ういふことがあります、私は月水金の日に先生の所に行くことになつて居つたが、金曜日に掛けたのであるが、途中で雨が降つて傘がなかつたから歸つた、之に對しての返事でありませぬ、金曜日に休むと月曜日に迄行かれないから、其晩に斯ういふ端書が來ました、其意味は

私は今日お前が雨に依て引戻されたといふことは驚かぬ、今日の代はりに

明日来て善いならば明日来い、次の金曜日には吾々はウイツサムに遊びに行くから、若しもお前とお前の友達とが行くことが出来るならば、吾々は大いに喜ぶ、吾々は自分達の家を午後四時迄に出立するであらう、若し雨が降るなれば吾々は其處に行くことは出来ぬ、船遊に行くことが出来る場合、合に於ては例時通り五時に読むことが出来る。

如何に先生の親切なりしかを知ることが出来ると思ひます。

それで今日迄、私が人に就て少々學問を勉強しました内に種々の人もありますけれども、どうも一番此先生が慕はしいやうに思ふ、それから私の友人笠原は明治十五年に病氣になりました、英國を去りました、十六年に今の帝國大學第一醫院で亡くなりました、先生がそのことを知られたときは非常に悲んで、大變立派な文章を書いて世界一のタイムス新聞に大弔文を掲げられた、タイムスを讀む人は先生の文章に依てさういふことを知つて呉れたのであります、私は

幸に身體が丈夫であつたものですから、後に残つて居りまして、明治十八年の末迄居れることになつた、十七年の始めに養母が病氣であるから歸つて來いといふことで残念ながら先生に別れを告げて、十七年の三月にオックスフォードを去つた、その時に先生が大學校に申立て、名譽の學位を私に贈るといふことになりました、一向私は頼みも何もしませぬですが、先生の全く好意でM、Aの學位を貰いましたオックスフォードを去つて倫敦に來て一週間程居りました。オックスフォードで先生の居らるゝ家へ暇乞ひに参りましたが、其時の顔といふものは今以て私の目にちらついて居ります、大きな手で以て私の手を握りつめどうか私の達者の間にモウ一遍出直して遣つて來て呉れといふことでありました、其後度々手紙を貰いました、此先生のお蔭にて倫敦邊りの中でも少々學者に出會うことが出来ました、併し外の人には餘り親しく致しませぬ、此先生一人のお蔭で以て大分解るやうになつたと思ひます。

其後笠原氏は亡くなり、私は歸朝することになつて高楠君が二十三年頃英國に行かれる事になつた、それで私も書面を先生に遣りましたが、先生は私共同様非常に高楠君を世話をして呉れました、高楠君は吾々より大いに才氣も發達して居られる、正當に課業を踏まれて卒業になつた、氏は私共とは違つて直に先生の家に行かれたもので學問の仕方も違つて居らるゝだらうと思ひます。併し此個人を引立てることに熱心といふことは彼國の學者は皆さうでござりをするが、その中にも自分の能く覺えて居るのは此先生であります。

易行院法海と頼山陽との話

私は京都に用事のあるときには泊りつけの旅舎がある、其處に小栗栖香頂師の弟の小栗憲一氏も同じ所に泊つた事がある、そこで私獨で居る所で次ぎの如き話をした。

法海といふ人の名が京都に於て名高かつた時分に、頼山陽は法海よりも年は若いのであつた、又雲華といふ人があつて後に學頭になつた人でありますが、此人は私の親の師匠であります、此人は山陽と仲が善かつた、蘭を能く書いた人であります、そこで法海の評判を聴いて、山陽は雲華を紹介者に頼んで法海師に遇つた、法海師は机に依て經を讀んで居つた、其處に山陽が這入つて自身の著す所の楠公の傳を以て之に示した、日本外史の五冊目に當る楠公傳で、われは山陽先生子供の時から調べたといふことであります、山陽自身の著述しました楠公の傳を以て示した所が、それに對して謂はるゝには、初對面の挨拶として、(小栗氏の文章を借りて云へば)

此頃聞く藝儒久太郎なる者、京に在りて酒を飲み、三年其親を省せず、而して忠臣楠子の傳を作ると、足下豈是れか、凡そ忠臣は必ず孝子の門より出づ、今不孝人の筆を以て忠臣を傳す、楠子にして知ることわらは必ず屑

しとせざらん、老耄も亦不孝人を見るを辱しとせざるなりと、言ひ畢りて座に復り、經をよむこと初めの如し。

といつた、山陽の方では御自慢で、骨を折つて書いた楠公の傳を持つて行つたのである、是は立派の文章である、結構に出来ましたと、法海が譽めるだらうと思つた、所がさう謂つたきりで元の座に飯つて知らぬふりをした、處が（再び小栗氏の文章に依ると）

山陽背に汗して出で、曰く、真に一宗の學頭なり。

とありて、如何にも佛教中の一宗派の學問を司る所の先生である、一宗の學頭の價値があると云つた、それで之を紹介した雲華も大きに安心した、實は紹介はしたものの、法海の挨拶には定めて汗を握つたのであらう、そこで雲華の方では失敬の言ひ分をしないで、

君は素より陽明學を講ず知行合一、乃はち今の時に非ざるなからんや。

とありて、山陽は陽明學を遺つて居つたで、君は平素陽明學の講釋をして居る人ぢやないか、而して知行合一といふことを知らない、實行が出来ぬ、知つて悪かつたと思へばそれを實行しなければならぬ、知ると行ふといふことは一致しなければならぬ、それで君が不孝であるといふことを知つたならば、學頭の言つた如く知行合一でなければならぬ、之を實行するのは只今の時ではないか、今其時が来たではないかと注意した、處が山陽先生は、平素能く書物を読んで居つたから、かやうの當座の際にも、左傳の言葉を思ひ出したので、其證據には、山陽曰く、

海公は夏日の日の如し、上人は則ち冬日の日なり。

と、今法海師が私を不孝者と叱つたのは夏の日の太陽の如くであつて、夏の日の太陽は恐しい、日蔭でも何でも暑くて日向に出ることは苦しい、今君の穩かに謂つて呉れたのは冬の日の太陽のやうのものである、冬の日は甚だ愛すべから

ものである、之は左傳の中にある、趙衰と云ふ人は晋の大夫です、其性質穩か
であるから冬の日の如く、趙衰の子息は趙盾とて夏の日に譬へて、畏れられた
ことがある、それをちやんと諳記して居つたので、忽ち二僧の忠言に感じて、
其晩旅装して翌朝京都を立つた、今日では一日に蕪州に行きまするのでありま
するが、今日より八九十年の昔のことですから、昔は一日に十里位しか行かれ
ないから、晝夜兼行しても五日もかゝつたのであります、それを小栖憲一氏が
私に話をしたのである。

尙山陽は是から毎年歸省することゝなつた、小栗氏の書いた本は翌朝繪詩史であ
る、其の評に、「蓋し海公に非ざれば直言人を感せしむること能はず、山陽に非
ざれば善に従ふこと流るゝが如くすること能はず、兩雄の美談、千載銘すべし」と
ありて、どちらも忠孝の道の爲めに遣つたのである、人の法とすべき所は忠
孝を忘れてはなりませぬ、ですから其事の爲めには失敬とは思ひながら、斯う

いふ大家に對して申して置いたならば、此大家が後には注意して來るだらう、
それで法海師も無遠慮に言つた、所が普通人であれば怒るのであるが、流石に
山陽で御尤も千萬として従つた、感服した、先年私は廣島に行つたが、山陽
先生の一族は今以て其家があります、廣島縣の人は自分の地方から山陽が
出たといふことを御自慢なされて居る、其山陽先生は流石度量の廣い人である
と見做さなければならぬ、と申した事であります。

私杯も始終諸方を飛び歩いて居るから、餘り度々は飯省することも出来ぬ、
別して先年越前に母が居つて、私も大變飯省を怠つて居りましたから、此話を
聞いた後に越前にいつて此話を母にも致しました、又寺に集つて居る人にも話
しました、一年に一度は飯省したいと心得て居つたが、本山の用が多かつたり、
外を巡回して飯れなかつた、が山陽先生はさういふ工合に善に従ふは流るゝ
が如くにせられた故に、私は一寸其真似事をした位である。

生れた日の出来事

私が生れましたことに就て御話しを致しますると私の生れました日には私の家に詩會がありましたと申す事で、さうすると私の父の友達が皆期せずしていふには、それは妙である、此子が育ちましたならば、母親より能く注意をして子供に勉強して詩を作り、字を読む様に話して置くがよい、それは母親の一つの役目である、事實談であるから、それを聞かして學問の事を勵ませるが宜しいと、誰がいふともなく謂つたさうです、それを母親が後に聞いて有難く思つたんです、それで、私が英國を去るに當つて、マクスミューラー先生にも此事を話しました、先生はお前が生れ落ちてから母親が苦心をして、それ丈にお前の身體を育て、呉れた、それ等のことを書くやうにと言はれましたから、履歴の中に書いたことがあります。

私の父兄は詩と漢學がすきでありまして、私の漢學は父兄に教へを受けました、私は子供の時から十五歳頃までは父兄の經書歴史杯の講義を聞きました、又、六歳の年に眞宗の正信偈(句の數百二十句)を暗記いたし、七歳にして淨土の三部經の素讀を卒り、それから四書五經の素讀にかゝつたのであります。

それで前に申した如く、私の生れた日の事を母は記憶して居て、何時でもそれを言ひ出しました、即ちお前の生れ日には、お父上が友達と詩會をして、其席に集つた人々は、今日生れた子供は文學の嗜きな子供になるであらうといつて下さつた、そこでお前に聴かす通り、お前の父の友達の總てが、お前が學問の出来る人になるやうに希望をして居る、それであるから、お前の勉強に於ては餘程熱心にならなくてはならぬ、勉強しなくては、父の友達の希望に答へることが出来ぬ、斯ういふことを何時でも母親が附け加へて話をして呉れた、私の

母は此等のやさしき言葉にて、言ふことは嚴肅にいふけれども、愛する所の慈愛からいふものですから、如何にも親切に言つて呉れた、私の母親の此等のやさしき言葉といふものが、何時でも私の子供の時から私の心の前に有り有りとあつた、母の謂はるゝ時許りでなく、始終私の心には忘れなかつた、今も同じ事でありませぬ、しかし私の父の友達が希望をして下さつた程のものになるとは到底出来ませぬが、唯私の願ひといふものは、私の健康の續く限り、——身體が不健康では仕方がござりませぬが——私が健康である限りは、私に佛教の僧侶として學問をしたのであるから、爲法不爲身で、法の爲めに私が出来ぬ丈のことを盡したいと思ふ、決して私自身の爲めでない、一身の爲めでない、廣く大法の爲めといふことに力を盡したいと云ふのが私の口癖であります。

このことはマクスミユラー先生の傳文集の中に挿入されたる私の履歴の中にも書き加へておきました、尙私が英國を去りて日本に返つて來てから後も先生

は能く親切に忠告されて、決して怠ては宜かぬ、怠けると折角英國に來て調べたことも忘れて仕舞ふし、生れ落ちてから母親が苦心をして、現在に迄仕てくれたそれに對しても濟まないから、能く注意して勉強すべしといふことを申し越されました、實に有難きことで、ホーンに自分の子を思ふ如くで居られた所が見えるのであります。

予の受けたる境遇と感化

文學博士 井上哲次郎

一番初めに受けた菅公の感化

私の生れた所は太宰府であります。太宰府は誰も御存知の通り菅公の廟の在る所でありまして、殆ど菅公の爲めに繁昌をして居るやうな有様であります。幼少の時は其處で學問をして居りました爲めに何に付け、かに付け菅公の感化を受けられた感じがするのであります。それといふは其處がさういふ歴史のある所であるからして、観るもの、聞くもの多くは菅公の關係を以て居るものであります。又人の談話に上るものが自然菅公のことに關することが多いから、事でありまして、さう云ふ所からして菅公を尊崇するの念が厚くなつた次第であ

ります。段々郷里を出で、各地方を遊歴したる後と雖も、尙も菅公に關するところがあれば興味を感ずることが少々でないのであります。兎角菅公とは絶つに絶たれぬ自然の關係が出来たやうであります。夫れで段々又菅公の詩文集杯を翫讀するに隨つて愈々以て其感化を受くること淺からざる感じがする次第であります。どうも文字に少なからぬ興味を有することになつて來ましたといふのは、一番始めに此の如き菅公の感化を受けたる結果に出でたのであらうと、深く自ら信ずる程であります。

次は中村徳山先生

其次に間接で無く直接の感化を受けたのは私が幼少の時に郷里で經書を習つた先生であります。其先生は太宰府の人で中村徳山と云つたのであります。此人は察する所獨學で段々學問を遣り上げた人でありましたから、郷里にあつては

耆宿ともいふべき老先生であります、此人に始め句讀を授かりましたは何でも
 それは私が八歳か九歳頃であります、先生が一々字を指して教へられました、
 其容貌、態度、言語、總て謹嚴なるもので幼少なる頭腦には大なる影響を及ぼ
 しましたことを今より覚えて居ります、最も幼少の時には二三年間甘木杯とい
 ふ所にも居りました、又後には博多にも居りました、さうして到る處色々の先
 生に就て學びました、けれども此徳山の教訓が一番身に浸みて居るやうに覚え
 ます、幼時の感化は主として徳山に依て得られたこと、覚えて居ります。
 私が徳山の塾に居りましたのは大抵十三四歳の頃迄であります、其十三四歳
 の頃、人にもあることでありませうが、私に於ては是から大いに勉強をして世
 に立ちたいといふ志が勃々として起つて來ました、それは今に於ても忘れま
 せぬ、殊に論語に書いてあるやうなことを實行して大に遣らなければならぬと
 いふ決心が起つて來ました、それに就ては太宰府の如き田舎の淋しい所では何

と無く堪えられない、何處かに往つてモット遣りたいといふ遊意とでもいふべ
 き感情が湧いて來たのであります、それからして博多に行きました、其處で二
 二年の間色々な先生に就て漢學洋學數學杯を勉強しました、併しどうも其邊の
 先生の方といふものは餘り弱いので、直ぐ種が盡きて了うのであります、モウ
 暫くすると習ふことが無くなつて了うといふやうななさけないことでありま
 す、それから長崎に行きました、長崎に懸て三年許り居りましたのであります、
 それからして長崎の學校から特に選抜されて東京の開成學校に送られました、
 開成學校に送られました所が餘程學問の模様が違ふやうに覺えました、却々長
 崎の學校所ではない、開成學校は、すつと、進んで居る様に覺えました、それ
 からして大に奮つて勉強をして開成學校から東京大學を卒業する迄約六年掛り
 ました。

原坦山師に依て受けたる佛教

此間に於て種々内外の諸先生に就て學んだのでありますが、其中に此先生が特に大に感化を及ぼしたといふのは餘りありません。併しながら強て二三を擧げて言ひますれば外國人の外は外山正一、中村敬宇、横山由清杯といふ人の教へたのが矢張後日の素養となつたやうであります。其外に原坦山の佛教の講義を大學に於て聞いたのが僅かのやうであつたけれども、後に至ては多大の影響となつて來ました。坦山師は當時主として起信論を大學に於て講せられたのであります。其起信論の講義を聽いて見るといふと、其中に眞如實相の説がありまゝす。其時に斯ういふ考へが起つたのであります。是に由て觀るといふと佛教といふものは強ち根底の無いといふやうなものではない、西洋の哲學でありましても絶對といふものがある、本體といふものがある、實在といふものがある、

其名は種々に變はれども、畢竟此世界に於て現象の外に其根底を爲して居るものがある。斯ういふ考へがあるので、昔は、希臘の時代より今日は獨逸最近の哲學に至る迄も斯る思想が伏在して居るのである、それと佛教の哲理とは自然に暗合をして居るので其説明の仕方は同じで無い、其名の付け合も違つて居る、併し其精神に於ては何等の異同も無いので、即ち之を左右逢原とでもいふべきであります。

其處で佛教も一種の哲學である、其中には西洋哲學と同様に却て深遠なる眞理が存して居る、斯ういふ確信が當時頭腦の中に取りました、それから佛教に對しては多大の興味を持つて來た次第であります。其後段々佛書を求めまして、佛教の教理を攻究することの出來ましたといふのは、元々坦山師が其端緒を開いて呉れたからのことでもあります。然るに佛教が斯かる深遠なる哲理を含蓄して居るといふことを確信すると同時

に耶蘇教といふものは、哲理上から云へば佛敎程でない、斯ういふことを深く感じたる次第であります、耶蘇教は宗教としては一種の感化力を有つて居ることとは否定されぬけれども、併し哲理の方は却々、佛敎に及ぶといふやうなものでない、斯ういふやうに考へたです、學生時代からしてかういふ考を有つて居りましたのは、全く當時起信論の講義を聴きましてから始つたことであります。

大學在學中に得たる思想上の影響

それから在學中にモウ一つの私の精神上に少なからぬ影響を及ぼして居る一つの事實があります、それは開成學校が東京大學となつてからのことであります、東京大學となつて、始めて此文學部といふものが出来てさうして其處で哲學を講ずるやうになりました、開成學校が東京大學と改稱せられたのは明治十年の四月の事であり、其頃のことであり、亞米利加人のフェネロッツサ

1、エドワード、エス、モールス杯といふ人が來まして進化論を講じ始めた、最もモールス氏は動植物學上からしてフェネロッツサー氏は哲學上からして同じく進化論を主張したのであります、所が其頃歸朝されました外上正一君も矢張進化論を主張し、幾許も無く、當時大學の總理と爲られた所の加藤弘之君杯も進化論に傾かれたのであります、かう云ふわけで進化論が一時に起つて來たのであります、今では進化論杯と謂つても一向珍しいことは無いが其頃は却々珍しいことでありました、それで私は未だ學生で居る時に、段々さういふ進化論を聴き又自ら進化論のことを研究し始めたのであります、所が斯ういふ感化が段々起つて來ました、進化論は科學上の真理である、科學上の真理として進化論に就ては少しも疑を挾むといふことはない、併しながら哲學上の真理としては進化論は未だ盡したるものでは無からう、其意味は世界の現象許りでは無い、現象の外に實在が無くてはならぬ、現象の方面は進化論で説明し得らるゝ

にしても實在の方面は進化論では説明し得ることは覺束ない、何となれば實在其ものは不變化的のものであるからして、進化杯といふことのあらう筈は無い、進化といふことが有れば、それは實在で無い、絶對で無い、眞如實相ではない、それで哲學を研究するならば、進化論丈では足りない、けれども、當時進化論を鼓吹したる人々は殆ど進化論が一切世界を解釋する關鍵の如くに考へたので進化萬能と謂はん許りでありました、どうもそれには同意することが出来ない、さういふ所からして、既に學生の時に大學の講堂に於て其趣意を演説したことがあります、其演説は一場の演説に止まらずして、後でそれを文章に綴りて當時大學より出版して居りました學藝志林中に記載して居ります、それは「倫理の大本」と題してあるのであります、それは此現象以外に實在といふやうな不變化的の根底があつて、それが畢竟倫理の大根本大源泉であるといふことを述べたのであります、斯ういふことを主張したのであります、詰り當時進化論の

驚々たるに際して一個の見解を發表した次第であります、それは卒業以前でありましたからして、明治十二三年の頃であります、それから其後、其倫理の大本と題した所の論文は又文盛堂といふ書肆の要求に依て一部の書として世に出版しました、其書は「倫理新説」と題してあります、さうして其中には倫理の大本を論じた許りでなくして、一方には大凡此世界の宗教は統一されなければならぬ、統一的の宗教が將來の宗教でなければならぬ、何となれば一切の宗教は同一の根底の上に立つて居るものであるからして、さういふことを述べたのであります。

倫理と宗教に對する議論の終始一貫

それで段々後になつては「倫理と宗教」との関係といふ著書の中にも更に其後研究したる結果を基礎として主張をして居りますのであります、それで此點に

於ては前後一貫して居るので耶蘇教徒杯が、往々此事を知らずして、耶蘇教と衝突しなる結果、倫理と宗教との關係を發表したやうにいふものがあるけれども、決してさうでないといふことは、學生時代からの論文と相照して見れば最も明瞭なことであります、それならば何故に此學生時代から後、倫理と宗教との關係を出版する間に、斯かることを述べなかつたかといふのは斯ういふ事情があつたのであります、大學を卒業して後、此倫理の大本を闡明するといふことに就ては却々強大なる動機があつたのであります、併しながら其時考へて見ましたに、どうも未だ世間の經驗が足らぬ、學問も固より足らぬ、是より西洋の哲學、宗教等の研究を遂げて見なければならぬ、そのみならず、親しく西洋に行つて彼の國の鉅々たる學者にも接して此意見を圖はして見なければならぬ、而して後に徐ろに本問題に立返つて嚴肅に考へて見ることが宜いことであらう、決して狼狽てはならぬ、大早計に速断を下してはならぬ、斯ういふ考へ

が起つたのであります、それ故に此問題は暫く宿題として残して、ずつと後に至りて更に本問題に立返つて、嘗て觀た所の倫理宗教の根本に於ては決して誤つて居なかつたといふ點に再び歸着して、さうして段々と宿題に就いて断定を下すことになつて來ましたので、決して前後撞着して居る杯といふことはないのであります、全く終始一貫して來て居る所であります、中頃に於て「教育と宗教との衝突」杯といふ書物を著はした、耶蘇教の國家的精神に反することを大いに戒めたこと杯があります、それは斯ういふ意味であります、耶蘇教が始め日本に勢力を扶殖しやうといふ、斯ういふ時に餘程國家的觀念に反抗した有様があります、其儘で行けば、日本の爲めにならぬといふので、大いに之に對して警戒を加へた所が、耶蘇教は其後大いに態度を改めて來たのであります、改めて來れば別に再び咎むる必要はないので、私の目的は達し得られて居るのであります、世界的道徳と國家的道徳といふものは、餘程甘く調和されて行か

なければならぬと考へて居るのであります。或る學者は、例へば、加藤博士の如きは國家道德のみを立て、世界道德を取らぬといふやうなことがあります。さう云ふ考へは間違ひであると思ふ、之に反して又當時の耶穌教徒は世界的道德のみを主張して國家的道德杯といふものは甚しく侮蔑して居つたのであります。それは間違であると思ふ、國家的道德と、世界的道德とは兩方無ければならぬ、此二つのものは併存して調和されて行かなければならぬ、斯ういふ私の持論であります。さういふ所からして衝突論も起つた譯であります。

東洋哲學史の編纂

大學を卒業して直ぐ洋行の噂もありましたけれども、其當時の種々なる事業からして、私の洋行が遷延することになりました。それからして空しく歲月を費すといふことは到底出来ぬから、此間に東洋哲學史の編纂を計畫しました。そ

れは斯ういふ考へであります。西洋の哲學は西洋に於て之を研究する所多くして獨逸杯では哲學史の類が澤山出来て居ります。併し日本に於ては東洋哲學史杯といふものは一つも無い、研究しやうといつても、却々端緒の付け様が無い、それで東洋哲學史を編纂したならば、後の學者の爲めにならうといふ考へからして此研究を始めたのであります。又佛教、儒教、其他東洋哲學に關する問題は、將來却々面倒になるであらう、之を知つて居るものが、我國に無くてはならぬ、さういふ所からして、東洋哲學の研究を始めました。是は今に至ても繼續して居るのであります。又西洋と東洋と兩方面の哲學を比較研究するの便宜を得やうといふのも一つの動機であつたのであります。

洋行中の感化

明治十七年に至つて漸く南洋に赴くことになりました。洋行は私に取ては大變化

を來したのであります。變化といつても主義方針に於て大變化といふよりは精神上新區域を開拓するの感がありました。西洋に於て親しく講義を聴き、教へを受けたのは、ヴント、チエレル、フッセル、此三人であります。殊にヴント氏の如きは今に至りても深く其學問に敬服して居るのであります。其外親しく接して其學問其人物等に依て少なからぬ感化を受けた人々は、主としてハルトマン、スペンサー、ネル等の諸氏であります。其外有名なる學者に接したことが度々ありますけれども、本統に感化を受けたのは今歴舉した人々であります。又讀書に依て感化を受けたのは、固より一々擧げられぬことでもありますけれども、其重なるものを擧ぐれば、カント、ダーウキン、ルッソー、シヨッペンハウエル、ゲーテそれから釋迦と孔子とであります。

服膺せる二個の格言

で、格言として私が平生眷々服膺して居る所は左の二つであります。

釋迦のいつたことに「三界に頼む無し唯道頼むべし」斯ういふ句であります。是は非常に面白い、どうも一生の方針として行くべきことであらうと思ひます。それは吾々が此世の中に於て道徳上頼みになるものといふものは外には無い、特殊の人を頼みにしたならば大變な間違である、其特殊の人は必ず、頼みになるとは限りませぬ、であるからして、どうも當てにならぬ、特殊の人は變はることがある、どうも一生かゝることに於て頼みになるといふものは何にもない、さういふ特殊の具體的のものを頼みにするよりは、無形ではあるけれども、永遠にして不易のものがある、それを捉へて自分の頼みとした方が宜い、さうすれば間違が無い、それは何であるかといふと、『唯道頼むべし』世界に於て人間當行の道といふものを發見して是に由て行くより外はない、是に由て行きさへすれば、何も外に恐るゝ所はない、必ず自分の精神に於て十分満足が得らるゝ

し、又其結果は必ず正しい所に至らなければならぬ。斯ういふ確信を以て進んで行くことが出来る、それで佛教といふものは實に錯雜したものであるけれども、實踐道徳の一つの法則としては此釋迦の言つたことを頼みとして行けば決して間違は無からうと思ひます。

又孔子の言葉の中には格言が澤山あつて殆ど格言許りと云つても差支無のであります、併し其中でも私が殊に名言として繰返して申しますのは、彼の易に出て居る『天行健君子以自強不息』彼の句であります、どうもあれは孔子でなければ言ひ得ない、此天地の運行といふものは實に暫くも息むこと無く進んで行くのであります、吾々個人も斯様に有るでなければならぬ、殊に段々老境に向ふに従つて此精神が無くては一生の事業杯といふものは大成し得られぬのであります、孔子が晩年に至りて益々斯かる勇壯なる精神を以て充たされて居つたものと思はれます、實に斯かる精神を以て勵んで行くといふことは人生の一

大快事であると思はれます、で吾々は唯其精神の幾分なりとも實行したいといふ考へからして段々此言葉の妙味を感じるやうになつて來た次第であります。

子の受けたる境遇と感化

海 老 名 彈 正

母の死と未來の觀念

私の母は私の十歳の時の五月に亡くなりました、これがモ一私に非常な影響を與へた、それより以前の記憶は断片で連続した記憶は有りませんが、其後は貰ひて記憶して居ります。

母の死は私に一種、來世或は未來と云ふ心配を與へて、大に宗教的となつた、私の壇那寺は眞宗で——此時初めて知りましたが——五十日間毎日參詣し、一年間は生物を捕らぬと云ふ宗教的習慣を守り、其間は蜻蛉一疋魚一尾捕らなかつた、母が生前に信仰したと云ふでの七々日は殿様の菩提寺なる黄檗宗の僧侶

に説教をして貰ひ、ソシテ法事供養は眞宗の方で營みました、私は何分未來が心配で堪らぬ、母の行衛が氣が、りでならぬ、來世が不明で、母は墓場に居らるゝのか、若しや地獄に行つて居らるゝやうのことはあるまいか、坊様は六道輪廻の事などを説ひて聞かせる、人が私の家の垣根の傍に蛇が一疋讀經の聲を聞いて居つたなど、話す、母がもしや蛇になつて御座るではあるまいかなど、非常の苦痛で、佛壇の香華萬端の世話は私一人であり、坊様が讀經の時など自ら團扇で煽ぐことなどをやつた、其時分眞宗の坊様がいろゝの事を聞かせ、梧窓浸筆一冊を貸して呉れて是を讀めと云ひましたが、其當時何事が書ひてあるのかも分らず、數十年後に買ふて初めて其書を讀みました。

何分墓場がイヤな心持らと與へる、至誠の徹するところ墓が動くと云ふから、私も至誠を通じて母の墓を動かして見やふかなど、考へたこともある、又母の病中には氏神に洗足參りをして禱るなど、兎に角非常に宗教的で、且つ厭

世的となつて爽快な心持は少しも無かつた。
かく母の行く先きが晝夜心配で堪らなかつたのが、不圖した單純なことから母の行先き丈けに就ては心配せぬこととなりました。それは下女が母の生前母の髪を結つて居る時、母が「自分の死んだ行先きなどは心配せぬが善い、自分は乾度天に生れる」と云つたことを聞いたので、此話しを聞いてから心持が大に變りました、併し厭世的な私の身心はやはり同じでありました。

誤て隊長を傷く

十三歳の時、藩の練兵に加へて貰ふた、其時分西洋式の練兵を盛んにやつたもので、私も好きでやり度くてたまらず、申込んだところ未だ弱年と云ふので許しが無い、それを無理やりに願ふてやう／＼加へて貰ふことになり、それから懸命に練兵をやつた、或日發火演習中本軍と賊軍に分れ、私は賊軍の方に加は

りてやつて居る際、狼狽して誤て銃の込み矢（今のやふな元込銃はなく）を入れた儘に打ち出した、それが本軍の方に飛んで運悪くも隊長の手を傷けました。さあどうして善いか心配でたまらぬ、家に歸るにも大に躊躇して暫くは入らなかつたが、仕方が無い、到頭歸て父に話すと、父は腹を切れと云ふ、自分も其覺悟をすると、父が兎に角自分が隊長の家に謝罪に行くから腹を切ることは自分の歸宅まで待つて、それからやれと云ふ、待つて居ると父が隊長から切腹なとに及ばぬと云つたからよろしとの事で、腹は切らずに済んだが、それから三十日間毎日隊長の宅に見舞ひに行く、父は自宅から隊長の宅まで行くに下計り見て歩め、決して四邊を見てはならぬと云ふ、その通りにして毎日行つて、其間の心配は實に甚しく、心配に恥辱が加はつて實にたまらなかつた、ソシテ毎日氏神や其他の神々に隊長の平癒を禱つた、清正公に「南無妙法蓮華經」お題目も唱へた、其隊長は今日も生きて居る人であります。

破壊主義のやり始め

かく宗教に就て熱心であつた私も、十六歳位から段々宗教的な心持が薄らいで、磊落で疎暴な當時の書生風に化せられ、別に神佛に不敬をすると云ふでは無かつたが、唯何とはなしにインデペンデントになつて來た、是は此年から英學をやり初めたことや、又其時代が排佛毀釋の盛んな時で、自然其影響も受けたのでありませう。

學校は藩(筑後梁川藩)の英學校で、時代の潮流何もかも日本の事物を打壊はすと云ふ時節、随分亂暴もやりました。其年英學の先生が歸國すると云ふ其送別會の時分、我々生徒六十人計りの中に一の相談が持ち上つた、それは藩の御城堀とて漁獵禁斷の場所がある、それへ一ツ網を入れようではないかと云ひ出した、藩廳の方へ願書を出した、中々許さぬ、そうすると今度は願書で無く「や

りませう」との届書を書いて出だし、すぐにやり初めた、先づ嚴重な水門の扉を打壊はし、船を入れて網を打つた、私は生徒の中でも一番若い方で、率先して大にやつた、何分三百年間禁斷の場所であるから、取れるとも取れるとも、非常なもので見物人は黒山の如くやつて來ると云ふ騒ぎ。是が私の破壊主義のやり始めです。

藩廳も黙つては居ない、其父兄にまでも廿一日間の謹慎を申付けた、が其謹慎の明くと同時に御城堀をも開放することゝなつた、藩の英學校は教員の無き爲め一時中止となつて、それから熊本へ出て熊本の洋學校へ入りました。

熊本の洋學校、これが私一生涯、精神的に第一の關係を持つて居る、私の總てを發育せしめた種蒔きは此在校中に出來たのであります。

私の父に私が學問すれば病氣になるとて、可愛ひ餘りに遊學を喜ばなかつたのを、強てやつたので當時随分苦學をして——勿論今の苦學生とは趣きが違ふ

が——貧乏な境遇をついけました。

精神の修養は眼病のお蔭なり

廿一歳に熊本から同勢大擧して、京都同志社に入つた、同志社に在ること二年、同志社では第一回の卒業生で九で熊本洋學校を移した有様、我々が總て規則を編むと云ふ次第で生徒でもあり教師でもあると云ふ境遇でありました、それで同志社では大した影響は無く何の記憶すべきことも残つて居りません。此二十一二歳から廿七歳まで、私は眼を病んで一冊の本をも讀めなかつた、色色工夫して書物を青く塗りたりして試みても半枚の字も讀むことが出来ない、同志社では同室の浮田和民君が親切に自分の復習をする時朗讀して呉れる、それを聞ひたりして同志社を卒業して、眼病ながらに或部分は京都に或部分は群馬縣に傳道事業に従事しました、私の眼が三頁もつゞけて書物を見られるやう

になつたのは三十歳以後で、特に五年程の間は五分間と字を讀むことが無かつたのであります、併し此五年間は私に取て非常に宗教的修養を興へた、今から考へて見ると、此眼病のお蔭が非常にあります。

冬枯れの境遇一陽來復す

廿七歳の時結婚をしました、此初めて家庭を作つたことが、又私の精神に大變化を興へた、私の今日までを二分し前を厭世時代とし後を樂天時代とするならば、此結婚が其岐路となつて居る、母の死で春が無くなりて夏も無く秋も無く、長き眼病で冬枯れの境遇に在つたものが、妻帯の爲に再び春を迎へることとなつた、それ迄は境遇の爲め非常なストイックとなり、涙も無き枯木寒巖の有様であつたものが、再び世間的の生命を興へ慰めを興へたのは結婚でありませ、總體横から來る反對や非難や強迫は少しも苦痛とするに足らぬが、内から

来る苦痛は随分たまらぬもので、私も眼病には大に閉口しました。

教會獨立論の勝利

卅八歳の時、初めて組合教會全體の獨立主義を唱へました、從來自分の教會丈
けは獨立して居つたが、此時全體の獨立を唱へ、基督敎界に大なる喧嘩を起し、
私は傳道會社々長の位置を打ち落された、則ち外國の傳道會社宣教師を排
して日本獨立の基督敎として思想の獨立經濟の獨立を唱へたので、經濟丈の
獨立ならば外人からは異論は無かつたろうが、是れは外人から經濟の助けを受
けて居る日本人から非常の反對を受けて、それから止むを得ず今日迄十五年程
戦ひつゞけ一方には國民の思想界日本の社會に對して戦はねばならず、一方に
は外國の同教徒、一方には日本人の同教徒と三方に戦ふて來た、併しそのお蔭
で銳氣も増し、信仰もますます堅くなり、學問も増して來たやうであります。

私の主義主張に、日清戦争に依て一段の勝利を得、次で日露戦争に依て全然の
大勝利を得ました、明治二十六年私に非常の反對をした人々が二十七年日清
戦争の時、傳道會議に、私が故意と黙して居つたが昨年の反對黨が已に盛んに
教會の獨立を唱へ出すやうになり、日露戦争に於ては最早外國宣教師に思想を
束縛されるやうな者は無くなり、基督敎の日本化することを拒む者は無い、主
義に於ては全然勝利を得たものと信じて居ります。

邦人にては蕃山と小楠及び豊太閤

先づ日本人の中で、私に感化を與へた人物を挙げますなら、第一に熊澤蕃山で
す、蕃山は詞章記誦の儒者でなく、實に活學者でありました、即ち時と處と位
とに應じて、活用極まりない處があります、聖人の學を獨り漢土の學とせず、
之を日本に應用して、日本的たらしむるに勉めました、彼は王陽明の學派では

あるが、必ずしも王陽明に偏してゐない、又儒者ではあるが、所謂儒者臭くない、佛者に鑑みて大に學ぶ處もあるし、殊にこの日本在來の神道に對しては、深く興味を有した人で、彼の道は、一方に片寄つてゐないといふこと、其道といふものは、何學派或は何宗派の專有するものでないと認めてゐました、彼は又非常な精神家で、而も理性の富んだ人であり、これは實に蕃山の最も感服すべき處と思ふて居ります。

そして又その情の清高で濃やかなこと、極高尚な文雅風流の道にも通じてゐたことは、どちらから見ても眞の日本人であらうといふ感じを起さしむる人で、私の最も敬服してゐる人であり、

其次には横井小楠を敬慕して居ります、其所由は、横井小楠は、蕃山をもう少し近く自分に認めることが出来たのであります、即ちわれわれを去ることが遠くない人で、維新の頃にゐたのですから、思想上種々の點で、遠くないだけ、

それだけ親しく感ぜられます、彼が識見の高かつた處、事に當つて窮せざる處、心事の高潔な處、これを一言で申すなら、高山流水の如き人物であつたと思はれます、で道を見る上に於ても、決して一方に凝り固まらず、儒者ではあるが、必ずしも宋儒を崇拜して、孔孟を輕んじた譯ではない、寧ろ天を仰いで、修養をなしつゝ、あつた人です、そこで私も其れを非常に敬慕する次第であります。それから少し流義は違つてゐますが、何となく私の心を爽快ならしむる氣象と、鼓舞邁進せらるゝが如き、感化を與えつゝある人は、實に豊太閤であります、その氣宇の淵遠で、英氣の更らに滯ほる處なく、又過去を顧ることもなく、現在と將來を見て、猛進する處には、毫も保守の跡が見えませんが、彼の行狀には無論多くの非難があるであらうけれども、然しその英氣の迸發する處、些の滯りのない、激瀾たる有様は、常に私を警醒して、奨励と慚愧を促すに足るものであります、日本の人で始終感化を與へてゐて呉れる人は、マーこれ位で

ありませう。

外人としてはビーチヨルとゼンス及びシユライ

エルマツヘルと使徒パウル

それから外國人を擧げて見ますなら、私の信仰の初めから、米國のヘンリー、ウオール、ビーチヨルの人格が、大なる感化を及ぼした様に思はれます、と申せば、性格が非常に違ふかの様に疑はれませうが、然し實に彼も亦高山流水の様な人で、一日も同じ事を爲てゐることが出来ない、天地の氣象を以てする人であつて、その感化は又大なるものであります、彼は卒先して、ダーウインや、スペインセルの進化論を受け入れた人で、當時の彼の國に於ける基督教徒のなし能はぬ處をなした、實に鵬の大なる人で、物事の判つた人と云はねばなりません、スペインセルが米國に行つた時には、悉くの基督教徒は、何等の歡迎もなさ

ず、大に不快としてゐた時に、彼は獨り大に歡迎した、之を以ても彼の思想が如何に公正であつたか判るであらうと思はれます、それからして從來の神學思想に養はれた、厭世的悲觀的の基督教を打破し去つて、神の眞意を發揮し、宗教心の快活力を教えて呉れたのは、大勳功と云はねばなりません。

もう少し近い人で申しますれば、直接に私を教えた處のキャプテイン、ゼンスの人格は、又大なる感化を私に與へました、彼が熱誠、彼が見識、又彼の信實は、實に宗教の眞味を示して呉れて、形骸の宗教を打破し去りました、で私の人格の根底は彼の與へた、原理に因つて、成り立つたと云ふて差支えないと思ひます、實に私の今日あるは、此ゼンスの感化が大部分を占めて居ります。

近世になつて私に感化を及ぼした處の者は、獨逸のシユライエル、マツヘルであると思ひます、彼が如何に深く、希臘の思索に這入つてゐたか、又如何に清く温かき感情の人であつたか、如何に神に對して、敬虔の情の厚かつたかとい

ふ處は、今日私の眞に敬慕して、止まない處であります。更らに古に遡つて申しますれば、前から申上げた人々に優つても劣らない程の感化を與へて呉れた人は、使徒パウロであります。年代も距たり、人情も變つてはゐるけれども、彼の人格は、學べば學ぶだけ大なるもので、彼が如何にして猶太教を打破して、猶太の基督教を世界に紹介して、世界の基督教となしたかといふ、其熱誠と氣魄と見識に至つては、仰げば彌々高く、斬れば益々堅くして、非常なインスピレーションを與へます。其他ヘブルの豫言者や、支那の聖賢中で、感化を蒙つた人が無いでもないが、これ等は一々紹介する必要もないと思ふから略します。

子の受けたる境遇と感化

文學博士 前 田 慧 雲

第一は祖母第二は父と叔父

私は安政四年の正月十四日に生れたのであります。生れた年の九月に母親が亡くなつて、遂に母親の顔を見知らずに生長した者であります。そこで祖母の手に養育せられました。勿論乳は乳母が與へて呉れましたのです。けれども養育の主任としては、マ一祖母の手を煩はしたといふて宜いのであります。處が其祖母が私が丁度十歳の時に亡くなられたから、其間は全く祖母が萬事の面倒を見て呉れられたので、祖母からの感化を受けたことが多い様に思ひます。祖母には三人の男子がりました。即ち其長男は私の父親で、あとの二人は

伯父に當るのですが、其三人の子供には、當時にあつては、力一杯の教育を受けさせたもので、私の父なども、二十歳までは漢籍の教授を受けて、それから三十一歳になるまで、長州萩の三千坊といふ寺に、真宗の學者があつたから、其處へ行つて、佛學の方の教授を受けたもので、他の伯父二人も力一杯に漢籍と佛學の研究をさせたさうであります、斯の如く私の祖母は、子供に出來得るだけの教育を施したといふ、世間側の物の判つた人であつたと同時に、宗教といふ方にかけても、志の非常に篤かつた人でありました、さう云ふ譯であるから、私が極幼少な時に、母親に別れてからといふものは、物心が判る様になるにつれて、宗教的感化をせられたのみならず、學問をせねばならんと言ふことを始終聞かされて居りました、が然し其學問をせねばならぬといふ事は、唯バツと謂はれたのではなくて、自分の子に學問させた實例を引いて、お前の父を見よ、叔父さんを見よと云はれたからして、子供心に深く感じて、自分も年をと

つたならば、遠方に出かけて行つて、學問せねばならぬといふ考が込み込みました。けれども曾に祖母のみならず、父親と、それから父の處へ、即ち私の家へ叔父二人が常に遊びに来て、種々な談につけて、宗教上の薰陶や、學問上の感化を與へて呉れたと思ひます、それは如何いふ風に感化せられたかと云へば、私の父は自身に宗教心が篤かつたからして、朝夕佛に仕へることや、又來る人々に向つて、法話をすることが、頗る懇切であつたので、信仰上からして萬事をやつてゐましたから、殊更らに私に教訓しやう感化をしやうと、力めたものではありませんが、側に見たり聞いたりしてゐる私は、不知不識の間に少なからぬ感化を蒙りました、そのみならず、夏の夕涼や、冬の炬燵の中、或は茶を呑んで雑談する様な時にでも、必ず宗教上の談か、學問上の談をして聞かされたのである。

確か八歳の時であつたと思ひますが、暫く叔父の寺へ行つて居りました、其寺即ち叔父の處へ、常に四五人づゝの書生が、手習や講義を開きに来ました、そこで私も手習をやり始め、經文も習ひました、勿論此お經は祖母に半分教はつて、半分叔父に習つたものでありますが、四書や五經は、叔父の家で教授に預つて、遂に私は寺小屋に行きませんでした、當時の教育法は、寺小屋で『いろは……』からして、『國畫』『商賈往來』を習ふのが順序になつてゐたので有りますが、私は初めから『唐詩選』や『三體詩』を書いて貰つて、習つたものであります。

三國志と日本外史

然るに丁度其時叔父の家へ、私の叔母の夫の弟が矢張り講義を聞きに来て、寢泊りしてゐたから、私も其室で一所に寢させて貰ふてゐました、私より八つ

ほど年が上であつて、繪を書くことや詩を作ることや教へられ、閑な時には『通俗三國志』の談をして、喜ばして呉れましたが、それが非常なる感化を私に與へました。

それは如何いふことであつたかと云ふと、彼の諸葛孔明の譚で、孔明が志を抱いて隱遁してゐた、處が蜀の劉備が、孔明に王佐の才が有ると云ふことを聞いて、三遍まで卓廬を訪うて、漸く三遍目に孔明に會ふことが出来た、そこで孔明は劉備の熱誠に感じて、其爲に蹶起して、身を忘れて漢室の中興を謀つた、と云ふ様な事に非常に感動して、人間は實に斯の通りでなければならぬと云ふことが、小供心に起つて、餘程強い印象を與へたものと見えて、今猶ほ其影が残つて居る様に思はれます。

それから後十一歳の時、即ち御維新の年であつた、兎角世間は、勤王攘夷の論が八釜しい時で、子供心にも何んだか、心がいそ／＼してゐましたが、忘れも

せぬ其年の梅雨の時に、雨の爲に外に出ることが出来ないで、父も自分も家にゐましたが、父が何か頻りに讀書してゐるから、お父ッさん、それは何の本で御座いますと尋ねると、之は『日本外史』で、頼山陽といふ人が書いた本であると答へて、頼山陽に就ての談をして聞かしました、是又非常に感服して、なんでも人間と云ふものは、學問を以て身を立てねばならぬ、學問の爲めには妄りに、人に頭を下げてはならぬといふ考が起つて、今日の私の様に、なんだか人に頭を下げるのが厭に思はれるのは、多分こんな所が原因してゐるのであらうかと思ひます。

石泉僧叡の事蹟に感ず

それから二三年の後、父から佛學の談を聞くに就て、時々眞宗の先哲の譚をして呉れた事があります、其の中に就て最も感じたのが、蕪州の石泉僧叡といふ

人のことで、父がそれを談すに就て、學問と云ふものは、此人の様な學問でないといふ眞實な學問でない、此石泉師の自身心の底からして出た學問で、眞の學問である、書物に書いてあるのを讀んで覺えたり、口の上から聞き込んだ丈けのものでは、學問とは云へない、今日の學者は皆書物の上の事を受賣したり、師匠の云ふた事を繰り返すに過ぎないので、眞實の學者でない、眞實の學者は、自分で一見識を立て、自分の心から出したものでなければならぬ、處が此僧叡と云ふ人は、自分の説が當時の學者に容れられず、本願寺からして糺問を受けなければもそれにも屈せず、安藝國の一田舎の長濱といふ處に隱居して、自ら學生を養うて、一生の間本山へは用ゐられずして終つた、その僧叡の目から見ると、本山に用ゐられてゐる學者共は子供同様であつて、初めから相手にしなかつた位であると話されて、大に感動しました、成程、學問は書物に書いてある通りを其儘云ふてゐる様ではつならぬ、どうしても一個の説を立てねば

ならぬといふ考が起りました、其後と云ふものは書物を見る度に、無理矢理にでも自説をこしらへて見やうと力めて、論語を讀んだ時には「論語考」といふものを書いて、其草稿が何處やらに有りましたが、今見るといふと可笑しい事ばかりではあるが、斯う云ふ事が多少の見識をつけました。斯様な事が私の今日を構成たものであらうと思ひますが、其後種々な人に就て教授を受け、講義を聞きましたけれども、以上の事が今日までを通じて感化して、此外には特に偉い感化を受けたことは無い様に思ひます、勿論これは年齢の關係で、年を取ると幼ない時ほど人間が純粹でないから、大いなる刺戟でも輕々に見過すのかも知れません。

藏書と書畫の感化

私の家には、其時代に近郷に於て、比較的書物の澤山にあつた家で、その

書物が無言の間に只なんとなしに學問上の感化を與えた様に思はれます、勿論有りたけの書物を一々讀んだのでもありませんが、朝夕澤山にある書物を目に見ると、年に一度づゝ、毎年蟲乾をしました、そこでこれぢやと云ふてお話するだけの明らか感化を呼起したのでもありませんが、冥々の裡に、學問と云ふものは爲なければならんと云ふ様に感じました。

それからして私の父は、格別に文事に長けた方ではなかつたけれども、然も文事を至つて好みまして、又茶の湯なども好きでした、その父の嗜好からして、書畫詩歌と云ふ様なもの、品評を常に父から聞きましたのみならず、叔父は父に比すると其點に於て長じてゐまして、書は随分うまく書きましたから、田舎では大意張りでありました、それで私もちよいと眞似をして見ましたのです、其叔父からも随分書畫の談を聞きまして、今日私が書畫や詩文を好む嗜好の出來たのは、全くさういふ處から來たものであらうと思ひます。

嗜讀したる歴史綱鑑補

さてその、學問に就て、如何な人物に就たかと申しますと、初めは桑名の藩士の岡篤庵といふ人に就て學びました。どういふ書物を讀んだかと云へば、多く支那の歴史を讀んだものです。即ち『左傳』とか『史記』とか云ふ漢書であります。その支那歴史中で、私が最も好んで度々讀んだのは、袁了凡の書いた『歴史綱鑑補』であります。それは丁度本文から標註に至るまで、三遍か繰返して讀んだと思ひます。『史記』の如きも亦大變に好んで讀んだもので、その外、當時最も世に行はれてゐた『靖獻遺言』の如き、何回讀んだものか判りません、實に愛讀したものです。

その後になつては十四歳の時の事であります。伊勢國の朝明郡東大鐘村に大賀賢勵といふ人が居た、號を旭川と云ふ、眞宗大谷派の僧侶であつたが、廣

瀬淡窓の門人で經學詩文に長じてをられた、處が惜しいことには四十年の一月廿四日に八十八歳で歿せられました。五十餘年の間塾生を教育せられて、北伊勢の人間で書物を讀むものは一人として其門に入らぬものはないと云ふて宜いくらゐるで、私も十四歳の時に入塾しました。其塾では多く經書の研究の傍ら詩を學んだもので、其時に『易』の講義を聞いたが、それが又非常に面白かつても餘程勉強したので、自身の理解力が非常に増した様に自覺しました。

十七歳名古屋に行く

それから十七歳の時に名古屋に行つて、佐藤牧山の塾に入りました。それには格別得た處がなかつた様であるが、感じたのは牧山先生の温厚篤實なこと、實に親切なものであつた。その塾には一種特別な風があつて、生徒の望み次第に講義をしてくれるので、私は易を望んで毎日私一人の爲に易の講義をして

貰ふてゐました。處が先生に差支があつて講義を休まねばならぬと云ふ様な時には、先生自から私の寓所へテク〜やつて來られて「今日は據ない用事があるから。どぞお出下さらぬ様に……」と丁寧に挨拶に來られたには、實に畏れ入つた次第でありました。牧山の塾に通うたと同時に、寺の名は忘れたが真宗大谷派の僧に遊蕪と云ふ老人があつた。頼山陽晩年の弟子で、其人から山陽の詩文に於ける説を聞きました。これで詩文に就ては大いに利益を得たと思ひます。

東京留學の斷念と算術の嫌ひ

處が當時は世間の風潮が漢學をやる者が減つて、皆洋學へ走る有様であつたので、私も是非英學をやらねばならぬと思ふて少しやりかけました。然るに田舎ではこれといふ良い教師がゐないから、東京へ留學に出やうと思つたが、學資

が無いので親が許さなかつたです。仍て暫くその爲に煩悶しました。けれどもいくら煩悶しても金が無いので仕方がない、そこで私は大いに考へました。此流行を追ふて多くの人のやる方へ附いて行ては容易に成功は出來なからう、それとも學資が澤山あつて思ふ處へ行つて勉強の出來る身分なら宜いけれども、金も教師もないことであつて見ると、如何様に勉強しても人の先を越すことは出來ない談である、よし一層のこと人のやらないことをやるに如くはない、そんなら矢張り今日まで學んだ漢學と佛敎の方へ更らに力を盡す方がよからうと思ふたから、一年程やつた英語を斷然抛つて仕舞つて、京都へ出て來ました。それが丁度明治八年で、本願寺で初めて普通科を教へる學校を設けた時でありました。で私も先づ普通科に入學して其學科を修めることになつたが、其科目の中に算術といふものがあつて、あーひねくり、こーひねくりして、いくらやつて見ても出來ない、それで私も自分ながら愛想をつかして、そんな嫌ひなこ

とをキユー〜〜やるよりも好きなことをやる方が宜い、何ぢや馬鹿し
いと抛つて仕舞ひましたので、今日でも其罰で算術が少しも出来ません。

大寶師の教訓

時に本願寺の聘に應じて肥前の草葉船山先生が京都にやつて來られた、これは
幸なことである、厭な算術をやるよりか自分の好きな詩文を一層學びたいも
のであると思ひまして、佛敎の研究の傍らに船山先生に就て詩文の稽古を更ら
にやりました、此船山先生には前後七八年詩文なり其他の漢籍に就て教授を受
けましたから、これも亦多少の利益を受けた様に思ひます。
それから後本願寺から留學を命せられて叡山に行きました、その時叡山では普
潤といふ人が『法華玄議』の講義をしてゐた、處が其講義は惠澄師の講義の其
儘をやるのであるから面倒臭くて仕方がないから、一日聞いたざりで止めてし

まいりました、それから何處かに名師は無いかと聞きますと大津の三井寺に大寶
と云ふ和尚がゐるが、其人なか〜の天台の學者であると云ふことであつたか
ら、叡山の松禪院の和尚の添書を貰ふて面會に行つた、然るに其時は一人も生
徒がゐないから都合が悪るのであつたが、私が懇に頼んだので、ではお前
一人の爲に毎日午後だけ講義を聞かしてやらうとの事でありました。

丁度私が面會に行つた時、大寶和尚は爐の上で葛根湯を煎じて飲んでをられ
た、湯呑片手に私に言はれるには『私は昨日から風をひいて薬を飲んで居るが、
薬を飲むのはこれが初めぢや、全體學問するものは身體が丈夫でないとい出來る
ものでない、私は學問をしかけてから殆ど六十年で、叡山にゐて叡山の僧の爲
に天台の三大部を講義した時には丁度九年かゝつた、その九年間に毎年休んだ
のは正月の元日と、山王權現の祭文日だけであつて、夜帯をといて寝たのは其
間幾日と數へる程であつた、それ程勉強したけれども薬一服飲んだことは今日

までない、お前はまー身體が丈夫さうにも見えないが、學問せうと思ふなら養生をしないよ、そーぢや、まーこれから四十年ほど勉強されたら少しは談が出来るであらう』と言はれた、私が二十二か三の時でありましたがモ一四十年と云はれたには實に驚きました、學問といふものは實に根氣ですぬ。それから毎日午後晝飯を食うてから通ひましたが、私一人を相手にして半日だけ講義して下されたのは誠に難有感じました、然るに此和尙の著述が數部ありますからそれを見ると學問の程が判るのであるが、講義は實にうまいもので、文章の味ひを噛み碎いて諄々と講説せられ、頗る識見に富んだ講義でありました、即ち自分の自説を飽までも押し立てる風な講義で、先人の糟粕をつゝさくさして談すのとは雲泥な差でありました。

それで私もこれは好い先生を得たものであると大に喜んで勉強しました、處が今から思ふて見ると、和尙が見臺に向つて講義せられたその講義よりも爐を圍

んで茶を飲みつゝ、雜誌的にチヨイ／＼談されたことが耳に残つてゐて、私が今日書物を披いて見る時に非常な利益を興へて呉れる様に感ぜられます。

明治四十一年三月廿三日
明治四十一年三月廿三日
印刷
發行

名流自傳
定價金四十錢

編輯者
東京市小石川區原町十五番地
江戶 肇

印刷者
東京市京橋區築地三丁目二十一番地
守岡 功

印刷所
東京市京橋區築地三丁目二十一番地
鐵國 光 社

不許
複製

發行所
東京市本郷區
東片町百十一番地
新公論社

一手大取次所
東京縣郵便局區內
染井傳中山縣邸內
內外出版協會

自治協會幹事長澤則彦著

模範自治村

内務省より認定せられたる三模範村長の苦心經營談なり發行以來各郡縣の買上げを受け已に數萬部を發行し版を重ねること七に及び

▲河北新報其社既全部を購けて曰く。其内容は悉く三村長の克己奮勵、知足奉公、博愛熱情の文字ならざるはなく、三ヶ村民の和親協同、博愛友誼の状如たざるはなし、而して全篇二百餘頁を熟讀し玩味するに從て、趣味は津々として盡くるなく、幾多の眞理は解得せられ、幾多の法理は咀嚼せられ、克己心奮起するに公心も涵養し、博愛熱情の琴線にも觸着し、自治の大體をも頓悟し得る等、大なる教訓大なる政治は皆此の裏より生じ来るを覺ゆ。要するに此書は單に市町村自治の參考書たるに止まらず、政治家教育家は勿論、全國民の座右銘とするに足るものとして推奨するに當らざるなり。

▲「日本人」曰く。三村長の村治上の履歷苦心、結果等を著者の苦心の末に蒐集したるものにて、自治體研究の良書、國民必讀の好著。

▲「中央新聞」曰く。政府は盛に日本全國一萬二千有餘の町村自治團體中より、特に村治の見るべきものを舉げて模範村と爲したる静岡縣の稻取、宮城縣の生田、千葉縣の源の三村に於ける美談を記述したるものにて、其叙事の詳密なる、恰も其身親しく實地に就て視察する觀あり、一讀大いに戦後の經營に資すべし。

▲「福島民友」曰く。靜に曰く千里の長堤も蟻の一穴より潰ると國政の常長は町村自治の經營に資すべし。

▲「彼三模範村」就て其事蹟を叙述して餘蘊なし、伏魔殿と目せらるる地方の町村自治に對する新光明、國民たるものは是非一本を購うて座右に供すべし。

發行所

一冊三十五錢、郵税四錢、廿部以上には割引す。
東京本郷區東片町百十一番地

新公論社

振替貯金口座番號三三四〇

文學博士前田慧雲
ブチエライ オ ホツダル 閑藤無染編

無盡燈

定價三十錢
郵税四錢

▲「無盡燈」 釋尊とキリスト二聖の福音に就て其似通ふた點を對較したものである。英文は英譯經典、ケラス博士リリ博士等の著書及新舊聖書等に依り譯文は主に編者の手に成つて居る、行文流麗にして難澁の點の無いのはうれし、世界二大宗教の始祖であり、絶世の偉人たる二聖の生涯と福音に於て、期せずして自ら類似點の多いのは味深い處で、冊々たる小冊子中、遠く多量の類似點を集め得た編者の勞は多とすべしである。余は多くの道を楽しみ人々に對して此の冊子を勧むるに躊躇せぬ。

▲「正教要訣」 本書は主としてケラス博士著「ゴスマル、オガ、ブツダ」及び「ブツダズム、エンド、イツク」クリスチアン・クリチクス、リリ博士著「アツダ、エンド、アツダズム」及び「アツダズム、イン、クリスチアン」の諸書に淵源し、佛耶二聖の生涯と其福音とを對較せんとするものにして、これを別ちて上編佛耶下編聖訓と爲し、各經典聖書の辭句を對比し、卷尾添ふるに英文を以てしたれば、獨り宗教研究者に便益を與ふるのみならず、修養に志す者及び英文を習得せんとする者に取りて無二の良師友と音ふべし。表裝美麗袖珍形の小さな本なれば携帶にも至極便利なり。敢て教會内外の兄弟に一讀をすすむ。

▲「新拂教」 釋迦と基督との傳記の上で酷似した點、及びその教訓の上で相一致した點、この二つの方面を一は基督教の聖典から、一は佛教の經典から、抜き出して、對照比較した頗る興味のあるものである。殊に英和の對譯といふことになつて居るのであるから、英語の讀めるものには、更に一段の興味があらう。

發行所

東京本郷區東片町

新公論社

新公論

東京最近の思潮を知らんと欲せば新公論を讀まざる可らず

世界最新の大勢を知らんと欲せば新公論を讀まざる可らず

新公論は内外有力の雑誌數百種より毎號前一ヶ月の有益なる材料を摘要掲載す是れ新公論が繁劇なる文明社會に特に重寶なる雑誌として有ゆる階級に歡迎を受くる所以

▲定價(毎月一回一日發行一冊十五錢郵税二錢) 半年分郵税共八十五錢一年分郵税共一圓六十錢

發行所

東京市本郷東片町 百十一番地

新公論社

振替貯金口座番號三三四〇

偉人研究

(第一編) リンコン言行錄

定價金拾四錢 郵税四錢

(第二編) トルスドイ言行錄

定價金拾四錢 郵税四錢

(第三編) ガーファールド言行錄

定價金拾四錢 郵税四錢

(第四編) フランクリン言行錄

定價金拾四錢 郵税四錢

(第五編) グラッドストーン言行錄

定價金廿五錢 郵税二錢

(第六編) 改二宮尊徳言行錄

定價金廿五錢 郵税四錢

(第七編) ローズヴェルト言行錄

定價金拾四錢 郵税四錢

(第八編) ワシントン言行錄

定價金拾四錢 郵税四錢

(第九編) 山鹿素行言行錄

定價金拾四錢 郵税四錢

(第十編) 中江藤樹言行錄

定價金拾四錢 郵税四錢

元版

東京 芝罘 烟台 濟南 青島 濰縣 龍口 煙台 威海衛 天津 保定 石家莊 唐山 秦皇島 承德 張家口 歸綏 包頭 蘭州 西寧 銀川 西安 鄭州 開封 洛陽 許昌 南陽 武漢 長沙 南昌 九江 杭州 寧波 紹興 嘉興 蘇州 無錫 常州 揚州 南通 徐州 蚌埠 蕪湖 安慶 九江 漢口 沙市 宜昌 重慶 成都 萬縣 貴陽 昆明 蘭州 西寧 銀川 西安 鄭州 開封 洛陽 許昌 南陽 武漢 長沙 南昌 九江 杭州 寧波 紹興 嘉興 蘇州 無錫 常州 揚州 南通 徐州 蚌埠 蕪湖 安慶 九江 漢口 沙市 宜昌 重慶 成都 萬縣 貴陽 昆明

內外出版協會

偉人研究

- (第十一編) 貝原益軒言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢
- (第十二編) ルーテル言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢
- (第十三編) 大石良雄言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢
- (第十四編) 聖徳太子言行錄 定價金廿五錢 郵稅四錢
- (第十五編) 吉田松陰言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢
- (第十六編) 渡邊華山言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢
- (第十七編) 熊澤蕃山言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢
- (第十八編) 新井白石言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢
- (第十九編) ナポレオン言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢
- (第二十編) ネルソン言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢

版元 內外出版協會 東叢京 鴨津口 郵座三第 阪山 井野 染五 區百 似五 郵番 五

偉人研究

- (第二十一編) ウェリントン言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢
- (第二十二編) 日蓮上人言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢
- (第二十三編) ペスタロッチ言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢
- (第二十四編) ゴルドン言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢
- (第二十五編) 佐倉宗五郎言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢
- (第二十六編) 法然上人言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢
- (第二十七編) 親鸞上人言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢
- (第二十八編) 道元禪師言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢
- (第二十九編) ビスマルク言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢
- (第三十編) 賴山陽言行錄 定價金參拾錢 郵稅四錢

版元 內外出版協會 東叢京 鴨津口 郵座三第 阪山 井野 染五 區百 似五 郵番 五